

# 下北半島のサル

2001年度（平成13年度）

調査報告書



下北半島のサル調査会

# 下北半島のサル

2001年度（平成13年度）

調査報告書

下北半島のサル調査会

目 次

山への誘い・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

2001年度 春季調査結果・・・・・・・・・・・・ 3

2001年度 夏季調査結果・・・・・・・・・・・・ 9

2001年 冬季ニホンザル調査報告・・・・・・・・ 24

2001年度 補足調査のまとめ・・・・・・・・・・ 37

特集1 『O群の歴史』再考・・・・・・・・・・・・ 40

特集2 下北のサルの秘密を探る

体重測定・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59

ホームページ新装開店しました！・・・・・・・・ 68

表紙写真

交尾の合間に大あくびをする

A87群のオトナ♂「ハゼ」

1988.11.4 脇野沢村九艘泊

撮影：松岡史朗

## 山への誘い

小林和弘

「ガサ、ガサッ。」サルか？ 違った、再び歩き出す。遠くの方から、「ゴッ、ゴッ、ゴッ、ゴッ、ゴッ!!」、「キヤ、キヤ、キヤ、キヤ、キヤ、キヤー！」今度は間違いのないサルだ。鳥の声でも、風の音でも、木の擦れる音でもない。山を歩き始めた頃、何を聞いてもサルに関わる音だと思った。聞き分けられるようになったのは、少しでも山を歩き、聞いたり、感じたりしてきた結果だと思っている。姿を見つける目も昔と今ではかなり違う。

「サルってどんな動物？」これが始まりであり、これまでもこれからもテーマである。

「動物を知ること」とは何だろうか、どうしたら良いのだろうか、これがベストと言う方法論はよく分からない。本や文献を読む、人の話を聞く、それも大切なことではあるけれど、それだけでは解らないし、やはり見ないことには始まらない。動物を見るだけなら動物園でも良いのではと思われるかもしれないが、果たしてどうだろうか。一つ一つの行動、例えば手の動き、食べ方、歩く時の足の運びなどは見ることが出来る。そしてそれは本来の動きと変わらないと考えられる。しかし食べているもの、食べている場所は決して自然ではなく、動物の全てを知ることにはならない。動物園に勤める私とその存在を否定する訳ではないが、やはり『飼育下での』と言う形容詞付きの話になってしまうことは否めない。

ではどうしたら？ 本来居るべきところで、その姿を目にすること観察することである。当然と言われるかもしれない。勿論自らの興味がアフリカのチンパンジーだったり中国のチベットモンキーであるなら現地に棲まない限り、頻繁には見に行くことは出来ない。

が、我々が追いかけるニホンザルは日本にいるのだから、見に行かないのは勿体ない。見に行くと言ってもサルだけをではない、サルがサルだけでそこに生きているのではない。食べているいないに関わらず、植物があり、風が吹いたり雪が降ったり、他の動物がいたり、人間の造った道があったりもする。取り巻く全てを知ろうとしなければ本来の姿は見えてこない。だからと言って難しいことは考えなくても良い。まずは山を楽しむ、歩くことを楽しむで良いと思うし且つそれが大切だと思う。花を愛でるも、鳥の囀りに耳を傾けるもよし興味こそが全ての原点である。

比べてみることは糸口として取り組みやすい第一歩だと思う。例えば、他の動物種との種による違い、同種間でも場所による比較、個体数による違い。サルで言えば群れによる違い、東京と下北、A群とO群、食性、遊動域、行動の比較、鳴き方、声そのもの、寄生虫相、風土や民俗学的な背景に至るまで、比較の視点は人によって異なり、アプローチも

それに伴って違ってくる。色々な角度から見ることによって、サル全体が解ってくるだろう。

見ていく中で大切なことは、自分の目を信じることであり、見たものは真実である。例えばそれがこれまでの定説を覆すことだとしても、否定し排除することはない。但しそれが全てではなく、ある偶然の条件が重なりあった結果である。今目前で起きていることはどの様なシチュエーションなのか、季節は、時間は、場所は、天候は、1頭か数頭か、年齢性別は、他の動物がいたか等、挙げれば切りがない、実に多くのことが一瞬のうちに生じている。ただその瞬間の切り抜きだけで、サルはこうであるとは言えず、そういうには記録の積み重ねが必要となり、かなり地道な作業の継続である。

結局話が戻ってしまうが、楽しくなければ続かないのである。動物や山はいつも色々な姿を見せてくれる、時間や場所、四季折々その移り変わりを視覚や聴覚、五感を駆使して感じることは楽しみの一つだと思う。例えば、フンの色は季節によって異なる。春先には若葉を、冬には樹皮をフンの中に映し出し、その色は文字にはならず、写真でも実物とは微妙に異なることがあるし、固さや臭いは実物でないと分からない。他にもサルの声は本当に「ゴッ、ゴッ。」「キャ、キャ。」かどうか聞いてみなければ解らない。記録するために記号としてカタカナを当ててはいるが、実際の声は自分の耳で聴き、感じてみて欲しい。それによって新たな声のコミュニケーションが聞こえてくるかもしれない。

もう一つの楽しみに、色々な結果や記録から想像を膨らますこと、推理することがある。歩いている最中に短期的に推測することもあるが、これまでの記録を見直して長い期間における流れを考察することもある。目の前の群れは一体どの群れか、どこから来てどこへ行くのか、なぜ今年はこの様に個体数が増えたのか、今年山の実りではどう冬を越していくのか、推理小説の如く目の前の現在から、過去を或いは未来を。

山の中ではどうしても木ばかりが目に入り、森を見失ってしまうことがあるから、時には森を出て遠くから見る必要があるだろう。山へ行けないからといって何も出来ない訳ではなく、山やサルに思いを馳せたり、他の動物にも目を向けたり、動物からも離れてみたりそんな時間に充てることも決して無駄ではないと思っている。

と、この報告書を手にする人達には、「釈迦に説法」のような話になってしまいましたが、これから下北を訪れる人へ、まだ歩き始めたばかりの人へのメッセージとして書いてみました。長い前置きになりましたが、いま現在感じていることは、「山へ行こう！！」この一言に尽きるのです。

## 2001 年度春季調査結果

小林 綾

かつては『幻』と言われた O 群ではあるが、最近では夏冬の定期調査でも連続して追跡できるようになり、個体数や遊動域などの今までよくわからなかった基礎的な部分もだいぶ明らかになってきた。しかし、夏冬の調査中は採食しているものの関係上、使っている場所が似通っており、それだけで O 群の遊動域とは言いがたい。1999 年・2000 年と連続して春の O 群を追いかけてきて、少なくともこのゴールデンウィーク前後は夏冬とは違った利用することがわかってきた。

この報告では O 群だけでなく、調査期間中に行なった大荒川方面の結果と、今春を含めた過去 3 年間の春の O 群についての考察を行なう。

### 《 調査結果 》

#### < O 群 >

4 月 28 日 快晴でほぼ無風。細間沢から入って穴間・青石・面木へ北上するがサル情報はなし。穴間・青石間の尾根でスギの切り出された跡あり。

4 月 29 日 快晴で南風がやや強い。細間沢から入って青石・面木・大崎を経て滝ノ沢へ向う。15:45 大崎の南でワカモノオス 1 頭が足早に北に向うのを目視。時々立ち止まっては北の方角を気にしているが、周囲にサルの気配はない。また、ハナウドの新しい食痕もあったが、この日は群れの情報はなかった。

4 月 30 日 快晴で風はわずか。面木沢林道から入って滝ノ沢から武士泊方面へ向う。10:45 ピーク 338 南西の稜線上でオトナのサル（性不明）を目視し、後に数頭のサルの声や姿を確認する。群れはピーク 338 南の谷に広がっていて、12:00 頃に武士泊海岸の方に向かって動き始めた。16:00 頃サルは武士泊沢河口の左岸で U ターンする様に海岸を南下し、17:00 前後に海岸の南端から斜面のやや中腹に向った。この日は最大で 22 頭、うち今春生まれのアカンボウを 2 頭確認した。

5 月 1 日 曇りでやや風あり。前日の泊り場と思われるところから北上、11:30 から武士泊海岸へ下りる道を北へ渡る。午後はピーク 395 の南の谷で停滞しそこで泊った。最大で 34 頭を数え、アカンボウは 2 頭のうち 1 頭はオスであった。また、個体識別をしているブナ(右鼻の切れたオトナメス)が 2 才くらいのオスや 5 才くらいのメスと一緒にいるのを確認した。

5 月 2 日 曇り後晴れで風強い。武士泊林道からピーク 395 へ向う道の半ばで群れを発見。昼過ぎまでその付近に停滞し、15:00 頃武士泊海岸へ下りる道を南へ渡る。この後、海岸側の斜面へ回り込んでさらに南下し、ピーク 338 北西の谷の中腹より下で停滞する。この日は 11 頭を数え、アカンボウ 1 頭とブナを確認した。

5 月 3 日 曇り後晴れで風は強い。ピーク 338 北西の谷の中腹より下を海岸に沿って南下するが、午前中は姿は見えず声だけで追跡した。13:00 滝ノ沢稜線から海

岸側に突き出た尾根上で、南下してくる群れの先頭に追いつく。サルは海岸側斜面を南下、ピーク 301 付近に至る。最大で 14 頭、ブナも確認した。

5月4日 雨時々晴れで風あり。8:30 頃にピーク 301 の南で南下する群れを確認した。12:00 頃に面木の稜線に達するが、この後群れは海岸斜面をかなり下りて南下し、13:10 に声が確認できなくなった。付近を捜したが情報はなく、面木・青石間の海岸斜面の何処かにいると思われた。この日は最大で 4 頭、ブナも確認した。

5月5日 曇りで東よりの風わずか。10:00 ピーク 300 西から青石の間の稜線上でハナウドの食痕と声を確認し、10:15 群れを発見した。サルはゆっくり南下し、16:30 に穴間・青石間のピークの海岸側斜面に達した。最大で 36 頭(表 1)を数え、ブナも確認した。

【表 1 O 群のカウント結果】

5月5日 13:25~14:55 青石海岸へ下りる道を北から南へわたるとき

	♂	♀	性不明	小計
オトナ	2	10(ブナを含む)	1	13
ワカモノ			4	4
4~5才			1	1
3~4才			1	1
2~3才			1	1
2才			1	1
1~2才			1	1
1才			3	3
アカンボウ			2	2
齢不明			9	9
小計	2	10	24	36
合計				36頭

\*アカンボウ 2 頭はこのカウント時には確認できていないが、他のカウントでは見ているので付け加えた。

【 個体識別 】

ブナ(オトナメス)…右の鼻が大きく切れている

< B 或いは U 群 >

5月1日 大荒川林道と長右エ門林道を調査した。大荒川林道には情報がなかったが、長右エ門林道では小荒川上流部の林道上で 13:35 に群れを発見した。最大で 34 頭(表 2)を数え、特徴のあるサルも確認している。

【表2 B 或いは U 群のカウント結果】

	♂	♀	性不明	小計
オトナ	3	8	3	14
ワカモノ	4	1	3	8
4~5才			2	2
3~4才			3	3
2才			2	2
1才			3	3
アカンボウ			2	2
小計	7	9	18	34
合計				34頭

【 個体識別 】

オトナオス(名前なし)…左上唇部に腫れ物のような膨らみがある

オトナオス(名前なし)…鼻先の鼻中隔が切れている(2000年2月・7月に海峡ラインにてO 或いはBと思われる群れと一緒にいた個体)

オトナオス(名前なし)…両鼻の穴が大きく見える

< 食べていたもの >

ギョウジャニンニクの茎・ブナの若葉・ハウチワカエデの若葉・マメ科草本の葉・イネ科草本の葉・ヤマザクラの花・貝・ハナウド(食痕)、

《 考察 》

今回はO群を7日間連続で追うことができ、それによって99・00年の同時期の調査では見失ってしまっよくわからなかった部分が、だいぶ理解できるようになった。00年の春は2日間しか直接観察できなかったのが主に99年春と比較すると、動きが実に似ていることが一目瞭然である(図2)。この時期は年にも依るが、ブナの芽が一斉に開く数日間と重なり、サルが最も集中してブナの花や若葉を食べる。しかし彼らもブナだけを食べているわけではない。地図からはわかりづらいかもしれないが、両年とも海岸の稜線から東へは殆ど行かず、海に面した西側斜面を主に利用している。そして重要なのは、その斜面を稜線から海岸までめいっぱい使っているということである。

ブナは稜線上に集中しているので、それを主に食べているのならあまり稜線から離れないはずである。しかし実際は01年の春でいうと1日に一度、必ずと言っていいほど海岸際まで下りていた。長いときには一日近く下りているこの行動は、99年・00年に見失っていたときもそうであったと考えられ(なぜなら、見失うのは必ず海岸側斜面だったからである)、特に木が真っ赤に見えるほど花芽のついていた00年の春に2日間しか追えなかったのは(勿論私の調査力不足もあるだろうし、霧雨の日が多かったことも影響はしているだろうが)彼らがブナだけに執着

していないことの表れではないだろうか。今回の調査では、海岸に下りたサルたちは貝や海岸際に生えていたマメ科の草本などを食べていた。これまでの脇野沢村周辺での調査でも、冬から春には北西からの風がないときに海岸へ下りて、海藻や漂着した野菜クズなども食しているらしい。O群の遊動域と考えられている地域には南は穴間から北は黒滝付近まで、南北約8kmの海岸が含まれる。中にはサルですら下りられない断崖絶壁もあるが、名前のついている穴間・青石・面木・大崎・武士泊の各海岸に下りている様子が伺えた。

全体の遊動ルートとしては、この時期は多少なりともブナの芽吹きの影響を受けて南北に移動することが確認できた。今回の調査では南のUターン地点は分からなかったが、2年前には穴間の稜線でターンして北上している。北はピーク395付近でひき返しているところが2年前と同じである。そしてこれらが同じ群れだということが確信できるのも、本調査で名前をつけたその名も『ブナ』というメスが2年前からいたおかげである。

もちろん海岸での食性や、この南北往復がブナの芽吹きの時のみに見られるのか、どのくらいの間隔で往復するのか、またこの時期に海岸斜面以外の場所を使うのはどのようなときなのかなど、疑問はまだたくさんある。しかし夏冬の調査時では、牧場や法面などの人工物をよく利用するので、春のように山中ばかりにいるときには本来のO群の生活を見ているような気がして、非常に興味深い。

長右エ門林道の群れについては、周辺の調査をしていないので群れを決定することはできないが、このあたりもよく夏冬の調査で群れが見つかる場所なので、B群にしろU群にしろ、使われることの多いところなのであろう。ただ、ここで見つかった場合はどちらとも決定できないことが多く、今後は個体識別できるサルを探して早く群れを決定できるようにする必要がある。

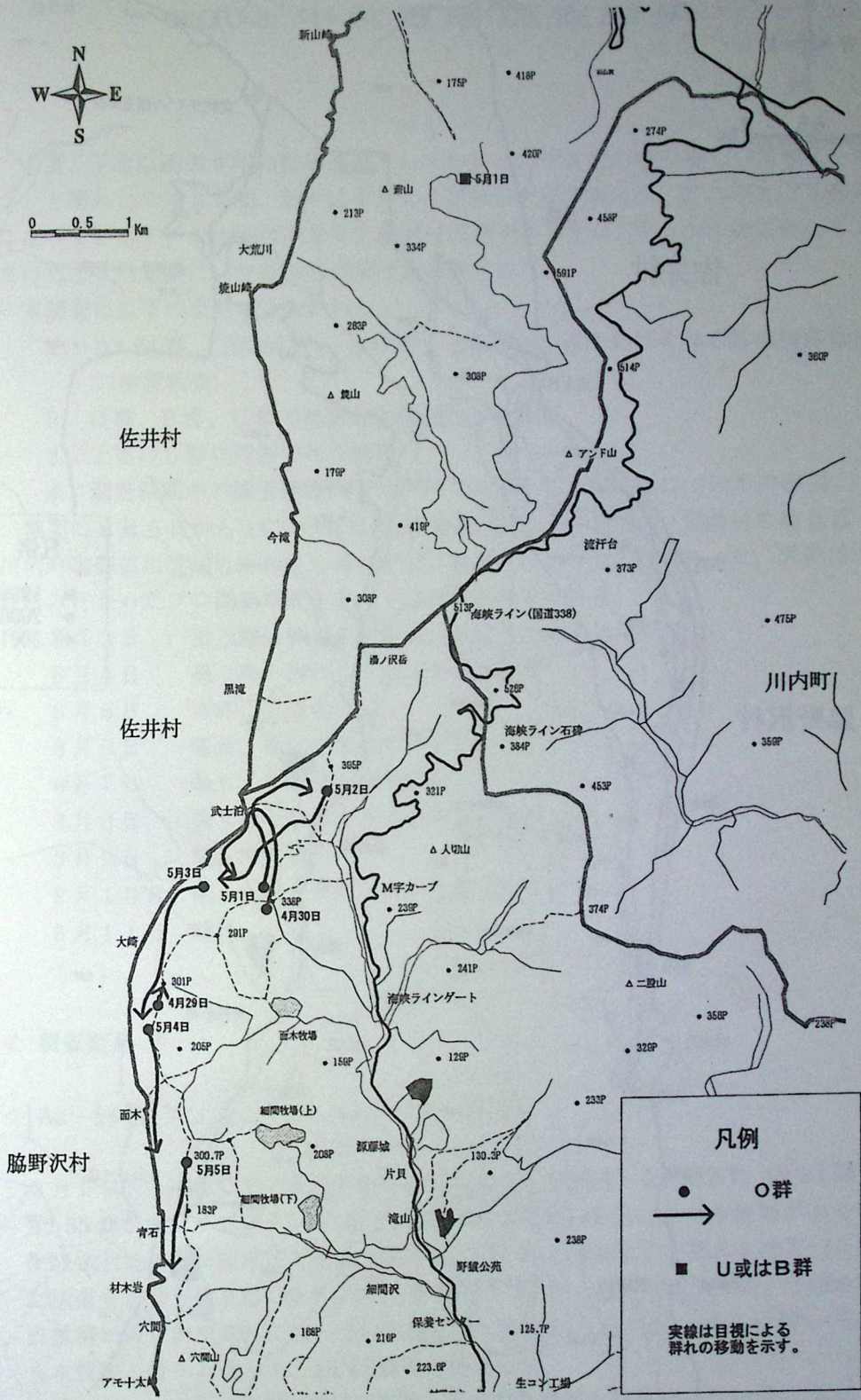


図1 2001年春季ニホンザル調査結果

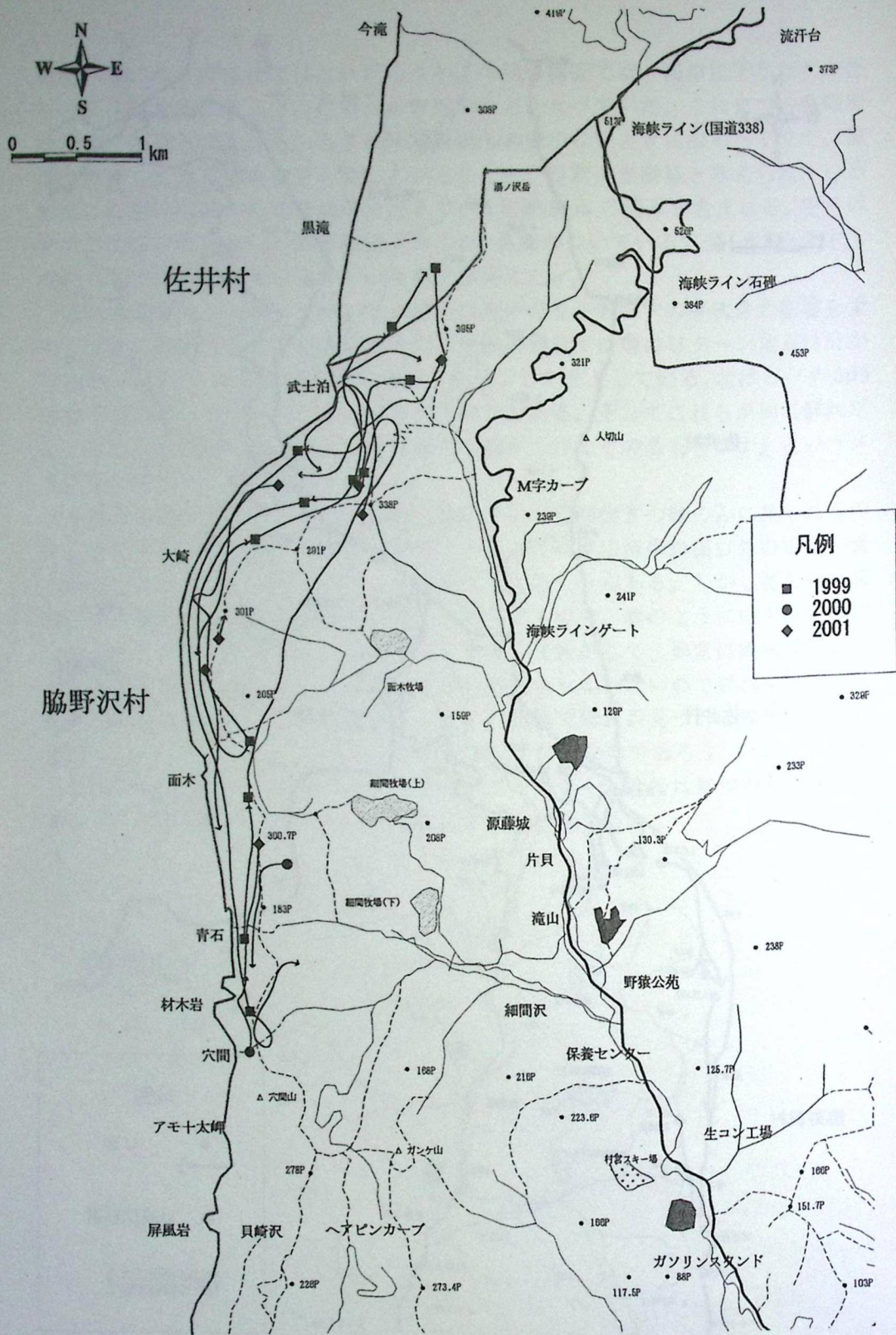


図2 1999~2001年春季ニホンザル調査でのO群の遊動

## 2001年度夏季調査結果

小林 綾

今夏、下北は過去2年の猛暑とはうってかわってやませの吹く涼しい気候で、カラッと晴れたのは2日間、あとはぐずつき気味の天気であった。このところ懸案になっているアブの出没は少なくて調査はしやすかったが、すっかり秋になってしまったような気候に、今後の山の実りが心配された。

本調査は以下の目的で行なわれた。

1. A2-84群、A2-85群、A87群、の個体数・構成及びそれぞれの個体識別の継続調査
2. O群、B群、U群の確認と個体数などの調査
3. 上述の6群の周囲の状況調査
4. 調査期間中の調査範囲内でのタイワンザル情報の有無についての確認

期間は8月6日から11日の6日間、調査範囲は脇野沢村全域・佐井村牛滝集落・川内町宿野部川流域とかわうち湖の南で、参加者は述べ39名であった。天候はO群のみ行なったプレ調査期間を含めて以下のとおりである。

- |       |                       |
|-------|-----------------------|
| 8月3日  | 雨と霧、特に午前中は土砂降り非常に寒かった |
| 8月4日  | 曇り時々晴れ、さわやかな北西風       |
| 8月5日  | 晴れ、快適な天気              |
| 8月6日  | 晴れ、風は非常にさわやか          |
| 8月7日  | 曇り、やませが非常に強い          |
| 8月8日  | 曇り時々雨、やませが非常に強い       |
| 8月9日  | 曇り時々霧雨                |
| 8月10日 | 雨、山の上の方はかなり霧が出ていた     |
| 8月11日 | 晴れ                    |

### 《 調査結果 》

#### < A2 - 84群 >

8月6日 4名で田ノ頭地区から瀬野牧場までを調査した。前日にA2-84群とA2-85群がガソリンスタンド(以下、GS)付近で接近して泊ったとの情報があった。9:12本村北の田ノ頭地区で国道338号線(以下、国道)東側にいる群れを発見。10:45に国道を西側へ渡り(25頭カウント)南西に向ったが、途中で見失った。14:00瀬野牧場の入り口で群れに追いついた際に40頭数え(うちアカンボウ6頭)、そのまま牧場を西へと進んで、15:10調査を終了した。

8月7日 3名で芋田・蛸田・寄浪・牛ノ首を調査。12:55~13:10牛ノ首にて群れを発見し、15頭ほど数えたがすぐに見失った。以後のサル情報は無い。

8月8日 3名で瀬野林道周辺を調査した。9:10頃、瀬野中学校裏でサルを発見し、群れは瀬野林道の南側を道に沿って北西へ移動したが、カウントの機会を窺ううちに見失った。14:40頃、瀬野牧場で再び発見し、最大で65頭(うちアカンボウ17頭)を数えて調査を終了した。

8月9日 2名で瀬野から九艘泊までの海岸沿いを調査した。14:45蛸田集落にて群れを発見した。サルは集落全域に広がっており、野猿監視員に追われていったんは集落の東側に移動したが、その後集落の北を西へ動いたときに47頭(うちアカンボウ6頭)を数えた。16:25調査を終了した。

8月10日 4名で蛸田から寄浪にかけて調査した。9:10蛸田の墓地裏で発見、群れはやや北へ移動し、蛸田の堰堤を東へ渡って寄浪に向った。15:10寄浪の墓地裏に達したところで調査を終了した。この日は最大で35頭(うちアカンボウ4頭)を数えた。

8月11日 4名で牛ノ首岬から瀬野まで調査した。6:22新井田にて群れを発見、県道を北側へ渡るサルを84頭カウントした(表1)。群れが林縁部を北上し、瀬野の大きな電柵の畑の南側を西へ移動するのを12:30まで追跡して調査を終了した。

【表1 A2-84群のカウント結果】

8月11日 6:22~7:40 新井田で県道を南から北へ渡るとき

	♂	♀	性不明	小計
オトナ	4 (シャチを含む)	21 (ワサビ・ササ・ユリを含む)	1	26
ワカモノ	6		2	8
4~5才	4		1	5
3~4才		2	8	10
2~3才		1	8	9
1才	1	1	5	7
アカンボウ			19	19
小計	15	25	44	
合計				84頭

◎コメント

遊動ルートについて特筆すべき点はないが、昨年の夏のカウントで73頭だった個体数が、今年は19頭もアカンボウが生まれているにもかかわらず84頭と単純計算でも8頭少なく、さらに昨年のアカンボウの数は12頭だったのに、今回のカウントでは1才が7頭になっていた。この減少は昨年の夏季調査でも見られ、そのときは前年生まれのアカンボウ8頭が1才になると5頭(10月のカウント)になっている(表2)。

カウントする時はたいてい、アカンボウは独立して数えるが、それ以上になると「1~2才」「2~3才」と分けることが多いので、一概に『減っている』とは言いきれない部分もある。しかし過去5年間の0~1才の数の推移を見ると、全体に翌年の夏には少なめで、やはり冬の調査から翌年の夏までの間に何かがおこって

いるのではないかと考えざるを得ない。

【表2 過去5年間のA2-84群における0・1才の数の推移】

	1996 夏	1996 冬	1997 夏	1997 冬	1998 夏	1998 冬	1999 夏	1999 冬	2000 夏	2000 10月	2001 夏
1才(～2才)	2*	5	11*	6*	9*	11*	10**	8	2*	5	7
アカンボウ	8	7	11	10	8	6	8	8	12	12	19
群れの総数	49	48	57	57	58	60	63	61	73	78	84

注) 群れの総数はほぼフルカウントで、\*は1～2才としてカウント、\*\*はカウント時はアカンボウが11頭となっていたが実際は8頭だったので、1才と思われる残り3頭を実際の1才の方へ足した。

この減少はどの群れでも起こることなのだろうか。ちなみにA2-85群の場合と比較すると(表3)、A2-84群よりも雌雄や年齢区分がはっきりしているので単純には比較できないだろうが、0才が1才になるときにほとんど変化のないことがわかる。そしてこの群れの総数が減少している98・99年には、ワカモノオスがグループで群れを出ている。

【表3 過去5年間のA2-85群における0・1才の数の推移】

	1996 夏	1996 冬	1997 夏	1997 冬	1998 夏	1998 冬	1999 夏	1999 冬	2000 夏	2000 10月	2001 夏
1才	4	4	6	6	4*	3	7	7	3	4	6
アカンボウ	6	6	4	3	8	7	4	4	6	6	12
群れの総数	37	36	39	37	45	35	40	35	39	39	50

注) 群れの総数はほぼフルカウントで、\*は1～2才としてカウント。

1才に上がる頃に数が減るが総数は増えていくA2-84群と、同じ頃にはほとんど変化せずに、ワカモノオスが群れを出て総数が減少するA2-85群。0才の12月から1才の8月までの間にA2-84群では何が起きているのか。両群のこの差はどこで起こるのか、個体数の問題なのかそれとも遊動域の環境の違いなのか、そもそも本当に何が起きているのか?爆発的に増えている様に見えるA2-84群ではあるが、その割には分裂しない理由とも関係しているのかもしれない。とにかく、この群れの分裂や遊動域の変化などと共に今後、アカンボウの性比や群れ全体の年齢構成も気をつけて観察する必要がある。

### < A2-85群 >

8月6日 調査を行なわなかったが、前日にGS付近でA2-84群と近いところで泊ったことと、この日の11:00頃に本村東の八幡宮付近にいたとの情報が野猿監視員から得られた。

8月7日 2名でGSから細間沢林道入り口まで調査した。9:58GS前(国道の東側)にてサルを発見、林縁を北上する群れを追跡したが、生コン工場を過ぎた

ところで見失った。15:30 野猿監視員と巡回していた調査員から 10 分ほど前にサルが国道を西へ渡ったことを聞き、直後にサルを発見して再び追跡した。16:15～16:45 群れは細間林道を北へ渡り、その時に 50 頭(表 4)を数えて調査を終了した。

8月8日 2名で滝山から源藤城まで調査した。8:25 下滝山沢の入口で発見、サルは林道に沿って東へ移動し、途中で上滝山沢の方へ向って源藤城神社の横を通り更に北上した。源藤城の北の電柵脇を通って農道を渡るときに 49 頭を数え、15:45 調査を終了した。

8月9日 4名で滝山から七引橋の南までを調査した。9:06 滝山集落東の丘の上の工事現場にてサルを発見、群れは野猿公苑の西側を移動し、12:00 頃滝山橋を西へ渡るときに 45 頭(うちアカンボウ 10 頭)をカウントした。その後は脇野沢川右岸を採食しながら南下し、七引橋の南まで移動して、16:52 調査を終了した。

8月10日 4名で田ノ頭沢から桂沢まで調査した。8:22 田ノ頭沢の生コン工場南の林縁で、南下しつつあるサルを発見した。途中で数頭が国道を西へ渡って畑に侵入していたが、群れとしては国道に沿って南下を続け、13:55 桂沢の針葉樹林まで追跡して調査を終了した。

【表 4 A2 - 85 群のカウント結果】

8月7日 16:15～16:45 細間林道入口を南から北へ渡るとき

	♂	♀	性不明	小計
オトナ	3 (ゴンズイ・イトウ・カマス)	12(ナス・コナス・ハギ・シロザ・ムギ・アカネ・アンズ・タチフジ・ウルシ・コムギ・カズラ・ヌルデ)		15
ワカモノ		4(スモモ・ナツフジ・ヤマハゼ・ヨモギ)		4
4～5才				
3～4才			2	2
3才	2	1		3
2～3才	1	2		3
2才		5		5
1才	3	2	1	6
アカンボウ (括弧内は母親の名前)	6 (カズラ・ウルシ・ヌルデ・アンズ・ヤマハゼ・ナツフジ)	5 (タチフジ・ムギ・コムギ・アカネ・ヨモギ)	1 (コナス)	12
小計	9	26	15	
合計				50

◎コメント

1996 年生まれの 5 才のメス 4 頭に名前をつけた。ウルシの子は「ヤマハゼ」、タチフジの子は「ナツフジ」、ムギの子は「ヨモギ」、アンズの子は「スモモ」である。

またコナスが調査直前の8月初めにアカンボウを生んだ。脇野沢の記録では最も遅い記録となる。これでこの群れのアカンボウの数は12頭となり、これまでで最も多い出産数となった。

それから、野猿公苑付近におそらくA2-85群由来と思われる2才のメスが一人である。どうやら交通事故にあい、体を不自由にしているらしい。今後の動向が心配される。

その他に名前のついたオス・メスに変化はなかった。

### < A - 87 群 >

8月6日 3名で九艘泊集落と自動車道路(以下、車道)を調査した。前日に集落の最西の畑、前々日には九艘泊小学校の裏に群れが出たという話以外、サル情報は得られなかった。

8月7日 2名で九艘泊周辺と車道を調査した。12:25~13:00パトロール中の調査員が車道の駐車スペース東で13頭のサルを発見した。その後は見失っていたが、14:01九艘泊小学校裏の林道法面で再び発見した。全部で6頭ほどいて、道路を東西に行き来しながらやや北上するのを追跡し、15:40車道上で調査を終了した。

8月8日 3名で九艘泊周辺と車道を調査した。8:40車道のヘアピンカーブで13頭(うちアカンボウ2頭)を発見、群れは北上して伐開地に向かった。13:00サルは伐開地から西へ向ったが、13:30見失い、周囲を探して16:00調査を終了した。

8月9日 3名で九艘泊周辺と車道、瀬野林道、細間林道を調査したが、サル情報は全くなかった。

8月10日 3名で九艘泊周辺と車道を調査した。8:45九艘泊の倉庫前でサルを発見し、集落の西側を南北に往復したところでいったん見失った。12:15車道のサル橋より150mほど北で再び発見したときには、群れは道路を東へ渡っていてさらに北上した。17:40ヘアピンカーブより道路を250mほど上がったところで動かなくなったので18:20調査を終了した。この日は最大で19頭数えた(表5)。

【表5 A-87群のカウント結果】

8月10日 九艘泊の車道を西から東へ渡るとき

	♂	♀	性不明	小計
オトナ	2	2 (クルミ・ワラビ)		4
ワカモノ	2 (8~9才と7~8才)	4 (アケビ・クルミン・コ ゴミ・コクワ)		6
4才		1 (シドケ)		1
3才(括弧内は 母親の名前)		2 (サクラ・アケビ)		2
1才(括弧内は 母親の名前)	2 (サクラ・クルミ)			2
アカンボウ (括弧内は母親 の名前)	1 (コゴミ)		3 (アケビ・クルミン・ コクワ)	4
小計	7	9	3	
合計				19頭

◎コメント

1995年生で6才のクルミの子はこれまでの愛称通り「クルミン」に、1996年生で5才のサクラの子はこれまで「お嬢」と呼ばれていたが、「コクワ」と改名した。

2000年3月頃のサツキの死後、群れの中心的存在であったサクラが、5月頃から行方不明となり死亡したと考えられる。これで9頭グループからのオトナメス三羽鳥はクルミだけになり、その下は1990年生まれワラビを筆頭に比較的若い世代となった。今年5才で初めて子供を生んだコクワは亡きサクラの子で、姉であるワラビ、アケビと共に今後群れの中心的存在になるであろう。

個体数については今調査期間では19頭が最高であったが、松岡氏によると7月15日にカウントした際には24頭で、A♂1頭・3才♂1頭・2才♂2頭・1才♀1頭の計5頭を確認している。

今後も1~2頭ずつではあるが出産可能なメスが毎年増えていくので、A2-84群とO群という大きな群れ2つに挟まれているこの群れがどのような変化を遂げるのか、非常に興味のあるところである。

< O群 >

ブレ調査も含めて報告する。

8月3日 武士泊林道・海峡ライン・蛸崎越沢林道・面木林道を調査。海峡ラインのM字カーブ付近から武士泊林道入り口までの間に1日以内ぐらいのフンを16個、さらに蛸崎越沢林道入り口で真新しいフンを4個発見したが、サルそ

のものは見つからなかった。

8月4日 海峽ライン・面木林道・細間林道を調査。面木牧場裏の伐開地で朝のフンを3個、面木林道の車止め付近で同じ位のフンを1個見つけるが、群れの情報はなかった。

8月5日 面木林道と細間林道の周辺を調査。15:45 細間林道の途中から下の細間牧場を見たときにサルを1頭目視、急いで牧場に向うが下にはおらず、上の牧場へ向う途中で16:32 声を聞いた。その後14頭まで数え(うちアカンボウは2頭)、個体識別しているブナ(オトナメス)も確認した。群れは道沿いに上の牧場に向い、ピーク208付近で停滞したので18:30 調査を終了した。

8月6日 2名で細間林道・面木林道周辺と細間・面木両牧場を調査。朝、ピーク208周囲に昨日のものと思われるフンを8個発見したがサルの姿はなく、その後面木林道周辺などを探して夕方細間牧場に戻ってくると、朝にはなかったフンが下の牧場に6個、更に穴間林道に入ってすぐのところにも1個あった。それ以外のサル情報はなかった。

8月7日 2パーティ4名で細間・面木林道周辺、細間・面木両牧場を調査した。9:57 下の細間牧場にてサルを発見、最大で10頭を数えた。群れは下の細間牧場裏の伐開地を通過して上の細間牧場の西端に出たが、この時牧場に展開しているところで22頭(うちアカンボウ3頭)を数えた。サルは尾根を越えて更に面木側へ向ったが、14:57 沢近くまで下りたところで見えたオトナのサル1頭を最後に見失った。その後面木林道周辺を探したが情報はなく17:30 調査を終了した。

8月8日 3パーティ7名で細間・面木林道周辺を調査した。16:11 面木牧場の東にあるブナノ沢林道とブル道との合流点にてサルを発見、約10頭を確認するが南の方へ逃げてすぐに見失った。16:40 面木牧場西端にあたる滝ノ沢林道を南から北へ渡るサルを発見するが、数えられたのは10頭のみであった。そしてまたすぐに見失い18:00 調査終了した。

8月9日 3パーティ6名で細間・穴間・青石・面木・武士泊・蛸崎越沢・源藤城の各林道と穴間から面木までの稜線、及び細間・面木両牧場を調査した。9:50 面木牧場北東の伐開地にてサルを発見、群れは面木林道の北を東へ移動していた。その後、12:50 から木材工芸センターのところで国道を東へ渡ったが、この時にフルカウントで51頭を数えた(表6)。群れは蛸崎越沢沿いを兩岸に分かれて上流へ進み、水源池公園の堰堤で沢の西にいたサルも東側へ渡った。その後尾根を越えてさらに東へ向い、源藤城林道の奥の谷で動かなくなったので17:30 調査を終了した。この日は個体識別されているブナも確認できた。

8月10日 4名で源藤城林道周辺を調査した。8:25 前日の最終地点にいる群れを発見、ブナも確認した。11:30 頃から群れは西と南へ広がって動き、このとき林道を南へ渡ったサルは少なくとも18頭、渡らずにやや西へ向い伐開地北の林で停滞していて14:30 頃から林道を南へ渡ったのが少なくとも15頭いた。15:50 にピーク129の北東から声がしたのを最後に見失った。

8月11日 3パーティ8名で上・下滝山沢林道、細間林道から九艘泊への新設道路と源藤城林道、面木林道から青石・穴間にかけてを調査した。源藤城・滝山

林道のパーティは午前中に源藤城林道でサルを捜したが、前日のフンを1つ見つけただけで他に情報がなかったため、午後はさらに南の下滝山沢林道から上滝山沢にかけてを調査した。するとピーク 130.3 の北東のカーブ付近で今朝のものと思われるフンを 11 個、足跡数頭分、ススキ sp の食痕を多数発見した。そこからの帰路、口広川への分岐から西へ 50m ほどのところで、14:31 下滝山沢の右岸からサルの声が出て、直後に 1 頭を目視した。サルは採食しながら林道を南へ渡ったが、広範囲であった為、カウントできたのは 26 頭のみであった。15:00 林道の南側で群れが停滞しているのを確認して調査を終了した。

細間・九艘泊方面に行ったパーティは、細間側からの新設道路の終点付近で 12:48 フンを 9 個とアザミの食痕、さらに西の谷からサルの声を聞き 1 頭を目視した。その後も九艘泊側の車道でフンを見つれたり声も多数聞いたが、おそらく A87 群の情報と思われる。

【表6 O群のカウント結果】

8月10日 12:50~13:40 木材工芸センター付近の国道を西から東へ渡るとき

	♂	♀	性不明	小計
オトナ	2	12(ブナを含む)	1	15
ワカモノ	8		3	11
4才		1		1
3~4才	1		3	4
3才		1		1
2~3才		2	2	4
2才			2	2
1~2才	1			1
1才			4	4
アカンボウ	1		7	8
小計	13	16	22	
合計				51頭

◎コメント

例年の調査の課題であった『O群のフルカウント』がようやく実現できた。これによって昨年7月に2日間、松岡氏らによって武士泊と海峡ラインで目撃された、右鼻に切れこみのあるメス(ブナ)のいる51頭と47頭の群れがO群であった事が事実となった。またその規模の群れは、遡ると1998年頃からよく見られるようになっていたので、考察しなおす必要があるようだ。今後は調査ごとに1回でもフルカウントができるようにしたい。またブナも断続的に観察でき、O群の指標としてかなり役に立っている。しかしやはり1頭では心もとないので、何とかして他のサルも個体識別していかなければならない。

遊動域では、O群がひたすら人のいるところを避けて動いていることが顕著となった。しかし、源藤城から滝山まではA2-85群の主要な遊動域でもあり、今回の調査ではA2-85群の南下に合わせるように国道を東へわたって南下したが、今

後この2群の関係がますます興味を引く。山奥でひっそり閑と暮らしていた印象のO群ではあるが、最近の事情はだいぶ違うようだ。

### < B群 >

8月6日 2パーティ5名で面木林道・滝ノ沢・武士泊林道・蛸崎越沢を調査するが、サル情報はなかった。

8月7日 2パーティ4名で面木林道・蛸崎越沢林道・武士泊林道・長右エ門林道を調査した。長右エ門林道では大荒川林道との分岐の少し先で1日くらい経ったフンを点々と6個、さらに薪山と縫道石の鞍部南で13:24オトナの性不明を2頭目視した。他のところではサル情報はなかった。

8月8日 2パーティ4名で大荒川・長右エ門両林道を調査した。長右エ門林道では佐井村森林管理センターのテント付近の水溜りで足跡を発見した。また同センターの方の話では、2日ほど前に4~5頭のサルが近くでエビガライチゴを食べていたとのこと。大荒川林道では長右エ門林道との分岐から1km以内の間にいずれも2日ほど前のものと思われるフンが7個見つかった。

8月9日 3パーティ6名で湯ノ沢岳・長右エ門林道・大荒川林道を調査した。海峡ラインから湯ノ沢岳に向う林道の入口で1週間ぐらい前のフンを1個、大荒川・長右エ門の林道分岐から大荒川林道に入ってすぐのところの3個、長右エ門林道の薪山付近で3個のフンが見つかった。

8月10日 7名で湯ノ沢岳・武士泊林道と海岸・大荒川・長右エ門両林道を調査した。長右エ門林道の薪山付近で、折れたアオダモの枝を発見したのみであった。

8月11日 4パーティ9名で武士泊林道・武士泊海岸から面木までの稜線・面木林道・湯ノ沢岳・長右エ門林道・大荒川林道を調査した。海峡ラインM字カーブ北側で昨夕から今朝にかけてのフンを1個、長右エ門林道では11:50小荒川の北で今朝のフン1個と気配、林道の終点では12:05に声と枝折れの音、何かが藪の中を移動するような音を聞いた。

### ◎コメント

ここ数年、武士泊から牛滝かけての地域ではフンなどの情報は多いのだが、目視は1群しか確認できないという調査が続いている。本当にこの地域には2群いるのか、その基本的なところから見直す必要があるようだ。また情報が点になりがちで、いまだに遊動域がよく分かっていない。連続した追跡結果による遊動ルート of 解明も急がなければならないだろう。

< U 群 >

8月10日 2パーティ3名で牛滝集落周辺と小荒川を調査した。9:24 国道と牛滝集落への道の分岐東で、道路の南側からサルの声がして 9:45 姿を目視した。10:01 道路を北に渡り始め、48頭を数えた(表7)。群れはピーク 305の方へ向って藪の中に入ってしまい、13:15 カウント終了と共に見失った。小荒川方面では滝沢入口の海岸でフンを1個?発見した。15:30 に小荒川パーティと合流して調査を終了した。

8月11日 2パーティ4名で牛滝集落周辺を調査した。8:55 牛滝集落への分岐で、牛滝川の両岸にサルを発見した。群れは広範囲で南から北へ渡りを開始しており、31頭を数えた(うちアカンボウ3頭)。サルは国道の北側を道に沿って北西へ向い、14:05 国道が海岸線を北上するあたりで見失った。またU群の一部かどうかわからないが、13:14 にU群本体が渡ったところよりやや東で2頭のオトナオスが国道を北へ渡った。15:30 に調査を終了した。

【表7 U群のカウント結果】

8月10日 10:01~13:15 国道338号線を南から北へ渡るとき

	♂	♀	性不明	小計
オトナ	7	13	1	21
ワカモノ	3	1	2	6
コドモ	4	8	1	13
アカンボウ	3		5	8
小計	17	22	9	
合計				48頭

◎コメント

U群が久しぶりに調査期間中に姿を見せた。1998年冬の調査時に長右エ門林道上の薪山と縫道石との鞍部で12頭+αを数えて以来である。牛滝にいるときのU群との区別で問題となるZ2群は分裂していることが確認されたが、発信器のついているグループが佐井村長後に、ついていないグループが同村福浦にすることが確認されているので、間違いなく牛滝の群れはU群である。しかし、なかなか遊動域が見えてこない。牛滝集落と長右エ門林道などを使うことは分かっていたが、脇野沢村からはアプローチが遠いので、群れの泊り場近くまでは時間的にどうしても追えず、連続した調査ができない。また、脇野沢村周辺と違って山が急峻で、人が歩けるところが限られるという問題もある。

今後、何とかしてこの群れを連続して追ひ、南のB・O群や北のZ2群との関係を明らかにしたいものである。

< 口広川・小沢川・男川・宿野部川流域 >

8月7日 2名で男川流域の荒川越沢・滑川・板家戸沢・松山林道を調査した

が、サル情報はなかった。

8月8日 2名で宿野部川流域の西又沢・金八沢と脇野沢村小沢地区を調査し、西又沢上流部の天狗森東付近で新しいフンを1個発見した。

8月9日 3名で男川流域の松山沢・滑川・板家戸沢と宿野部川流域の西又沢・金八沢を調査したが、サル情報はなかった。

8月10日 3パーティ6名で口広川・小沢川・男川流域と小沢集落を調査した。流域の調査では口広川上流で1日ほど前のフンを1個発見した。集落では春から夏にかけて、数頭のサルが時々出没して畑の物を食べるという話を聞いた。

#### ◎コメント

これまであまりサルの出没のなかった小沢地区にハナレザルが頻繁に姿を見せるようになってきている。調査で対象にしている群れは皆一様に数が増えつつあるので、今後どのように遊動域が変化してくるかわからない。群れで出るようになる可能性もあるので、この地域は引き続き注意深い調査が必要となる。

#### < その他の地域 >

8月9日

①2名でかわうち湖南の半太郎沢・貫通林道・三家戸林道・四家戸林道・新三郎林道を調査したが、サル情報はなかった。

②2名で大畑町・むつ市より西の地域の主に海岸沿いの道路を調査した。仏ヶ浦手前500m地点で5個(数日前)、福浦から北へ5km地点で1個(二日前)、長後の手前に1個(1日前)のフンを発見した。

#### < ハナレザル >

8月7日 13:24 長右エ門林道の薪山と縫道石の鞍部南でオトナの性不明を2頭目視した(B或いはU群の一部の可能性もあり)。

8月10日 8:50 海峡ラインのM字カーブ北でガードレール上にいる2頭のサルを発見。一頭は5~6才のオス、もう一頭はワカモノの性不明で、すぐに武士泊林道側に下りた。

#### < タイワンザル >

調査中にタイワンザルに関する情報はなかった。

< A1群(野猿公苑) >

【表8 A1群のカウント結果】

	♂	♀	性不明	小計
オトナ	13	16		29
ワカモノ	2	3		5
4~5才				
3~4才			5	5
2~3才			3	3
1才			1	1
アカンボウ	4	5		9
小計	19	24	9	52
合計				52頭

\* A♂には別の檻に入っている1頭も含む。

< 食べていたもの >

◎ 自然のもの

・植物性のももの

クズ(葉・花)、ヤナギ(樹皮・内側の皮)、オニグルミ(葉・実)、ホオノキ(若い実)、ニガキ(実)、クローバー(葉・茎)、ササ(葉・茎・芽)、スギ(葉)、ススキ(葉・茎)、ノブドウ(葉・実)、トリアシショウマ(花)、フキ(茎)、ボタンイボタケ)、アシ、エビガライチゴ(実)、イネ科(穂・葉・茎)、スゲ(髓)、トチノキ(幼木の根の樹皮)、エゾニュウ(茎)、ヤマブドウ(葉・茎)、コブシ(葉)、ツ(ハシバミ(実)、サルトリイバラ(実)、ノゲシ(花・種子)、ツタウルシ(葉)、ヤマハギ(葉・実)、イタドリ(茎)、ニセアカシア(花の跡)、ミツバ(花の跡)、マタタビ(葉)、

・動物性のももの

イナゴ、イモ虫、毛虫、バッタ

◎ 畑のもの

ジャガイモ、ダイコン、トウモロコシ、スイカ、クリ(葉)、カキ(実・葉)

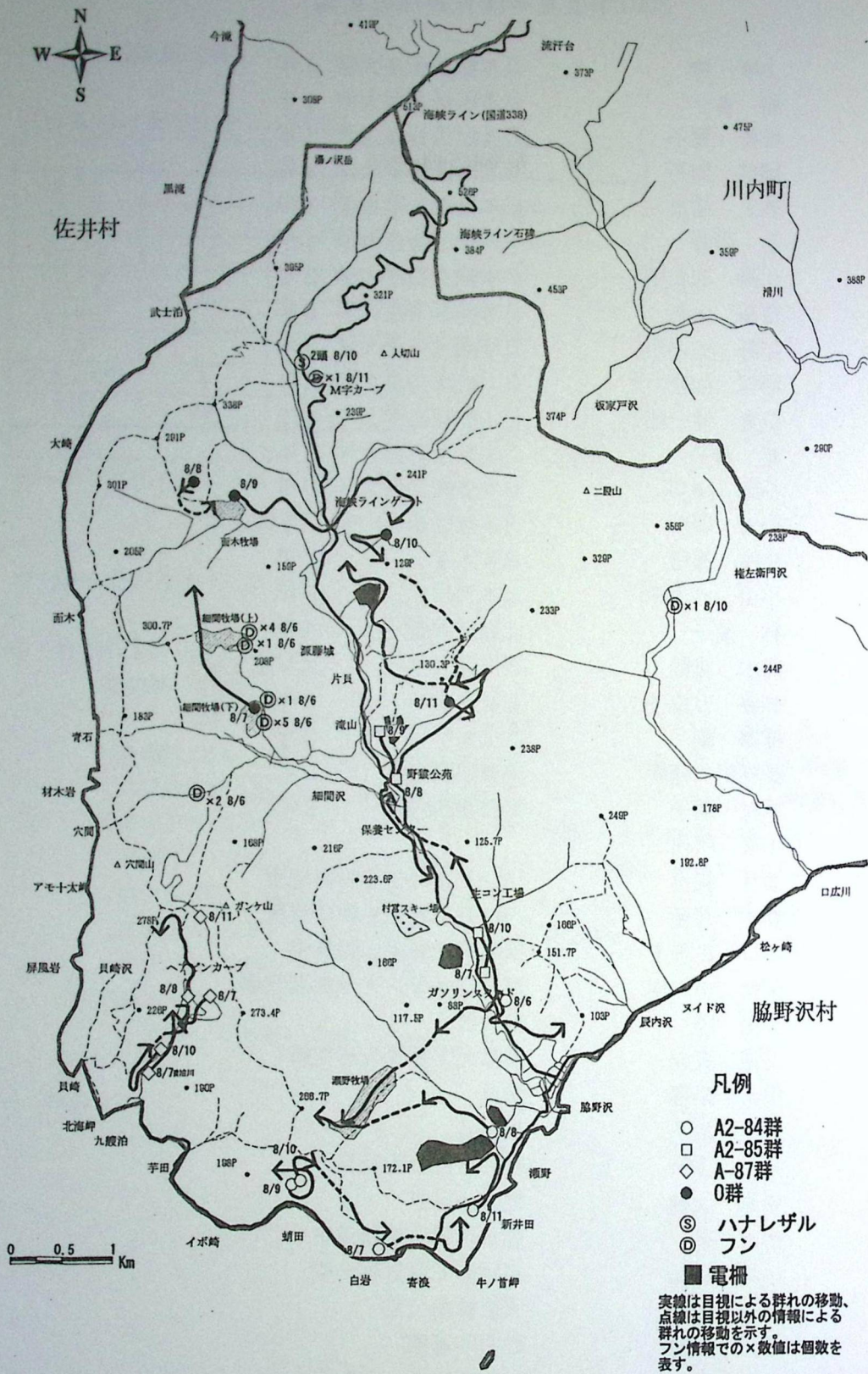


図1 2001年夏季ニホンザル調査結果(脇野沢村)

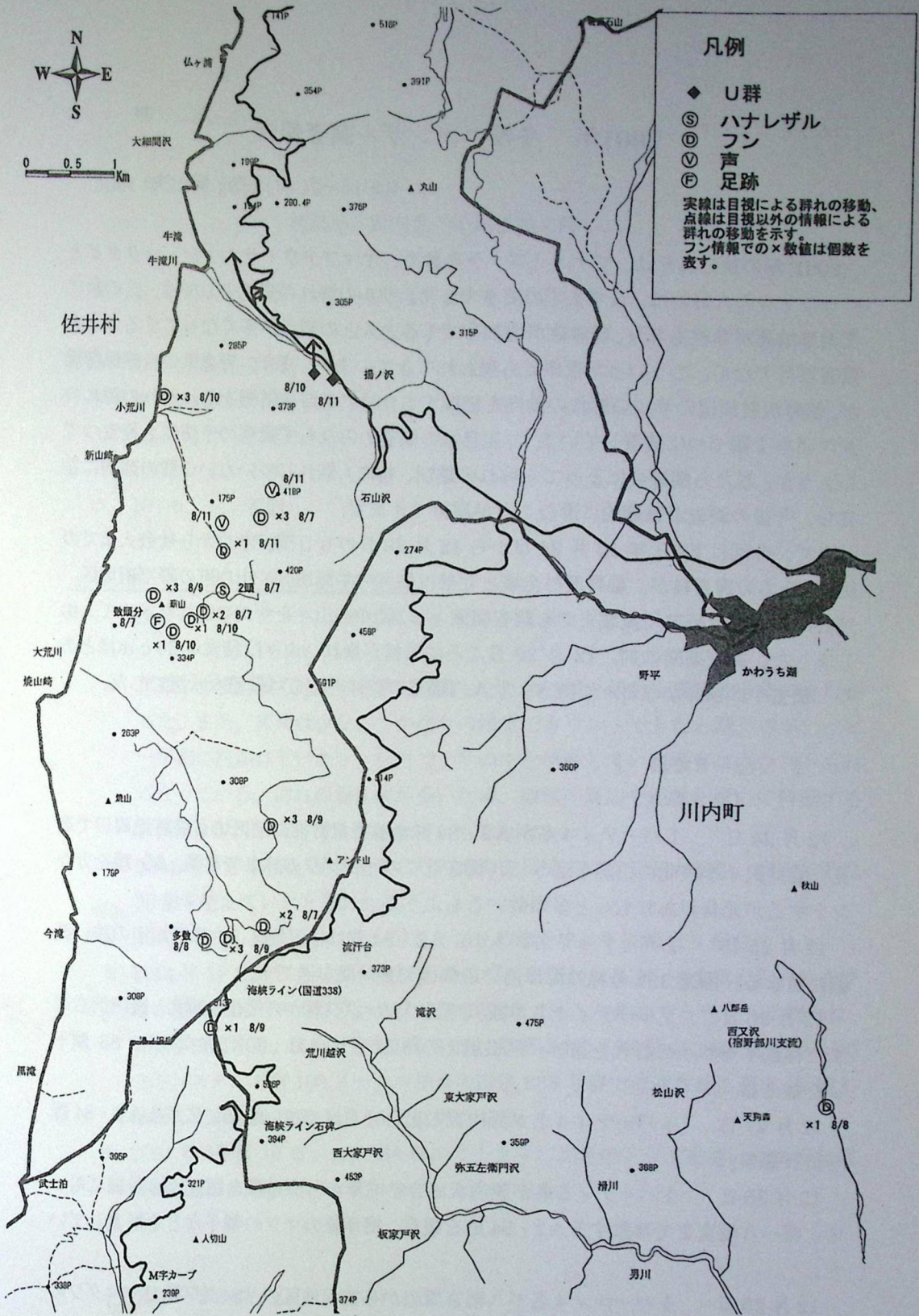


図2 2001年夏季ニホンザル調査結果(佐井村・川内町)

## 2001年 冬季ニホンザル調査報告

松岡史朗

2001年の秋の実は、ブナ・ミズナラを含め、ヤマブドウ・サルナシ・マタタビといったサルの大好物は、まずまずの實りでした。サルの群れの変化としては、この秋に交通事故死が3件もあり、個体数が増加してくると人との接点が多くなっていくことを猿害だけでなく、こういった現象でも現われてきています。また、青森県の自然保護課が、脇野沢村周辺のサルの群れの動向を把握するために電波発信機をそれぞれの群れのメスザル1頭づつに装着しています。生息域の調査のみならず猿害の予防にも役立つでしょうが、私たち調査会にとっても群れの識別、特に人馴れしていないO群の識別に役立ち、今後の調査が飛躍的に進むことが期待できます。

さて、今回は2001年12月24日から12月29日の6日間、学生から社会人までの総勢45名の調査員が、脇野沢村全域と北部は佐井村牛滝地区・川内町の野平南地区、東部は川内町宿野部川流域までを調査範囲とし、初冬の日々をサルの群れを求めて入山しました。調査期間の前、12月20日ごろに天候が崩れ、山々は積雪が20cmほどあり、調査中は穏やかな日々が続き、サルの調査の条件としては最適な状況でした。

### 『 A2 - 84群 』

12月24日 1パーティ4名がA2 - 84群を脇野沢村桂沢地区の斎場跡地周辺で見、脇野沢小学校北の山際を通り、八幡宮近くのヤマグワの林まで移動。53頭をカウントするが死角がありもっと多頭数いるもよう。

12月25日 1パーティ7名が入山。A2 - 84群は桂沢地区、八幡宮周辺の狭い範囲に留まる。国道338号線の海岸沿いの斜面で長時間を過ごす。

12月26日 1パーティ4名が桂沢地区のヤマグワ林から尾根を越え、辰内沢右岸まで移動するサルの群れを追跡。尾根越えの時(10:10~11:30)にカウント。83頭+ $\alpha$ を数える。

12月27日 1パーティ4名が辰内沢の出合い右岸の狭い範囲に広がるA2 - 84群を終日観察。

12月28日 1パーティ5名が辰内沢出合い右岸から海岸線を国道338号線に沿って、西へ八幡宮まで移動するA2 - 84群を観察。海岸線のマツの種子などを採食していた。

12月29日 1パーティ4名が八幡宮周辺から桂沢地区のヤマグワ林でヤマグワの冬芽・樹皮を採食する群れを観察。

「 構 成 」

2001年12月26日(10:10~11:30)

桂沢から辰内沢への尾根越え時

オ ト ナ	♂	2 (シャチを含む)
	♀	16 (ワサビ、ササ、ユリ、ゴマを含む)
	不明	6
ワ カ モ ノ	♂	5
	♀	8
	不明	9
コ ド モ	不明	18
ベ ビ ー	不明	11
年 齢 ・ 性	不明	8
合 計		83頭+α

- \* 下草にササが茂る尾根を足早に移動したため、性と年齢を正確に確認できなかった。また、死角は少なく、かなりの精度でカウントできたと思えるが、ベビーが胸に抱かれていたり、自力でササの中を移動していた場合はカウントもれになっている。群れの個体数が多いため、群れの周辺で距離を置いて移動するオスザルがカウントできていないかも知れない。
- \* 2001年3月17日、寄浪地区白岩の海岸側斜面でツツジが大往生。推定年齢は30歳を越えていたと思われる。
- \* 2001年8月14日、ベビー(♂)がツツメの畑でネットに絡まり死亡。
- \* 2001年11月7日、A2-84群の周辺ザルと思われる13~14歳ぐらいの♂ザルが国道338号のガソリンスタンド北200メートル地点でトラックに轢かれ、交通事故死する。また、翌11月8日、早朝にA2-84群の2歳の♂ザルがガソリンスタンド南100メートル地点の国道338号線で交通事故に遭う。保護し治療したが、2002年1月14日に死亡した。
- \* 2001年11月19日、A2-84群のオトナ♀に赤色のテープを巻いた電波発信機が装着される。この♀ザルをゴマと命名する。

『 A2-85群 』

12月24日 1パーティ4名が田の頭沢出合い近くでA2-85群を発見、群れ

の北上と共に踏査し、イノシシの館の南まで移動する。

12月25日 2パーティ4名がイノシシの館東側の山際周辺から北上し、下滝山沢南まで移動する群れを踏査する。

12月26日 1パーティ7名で入山。下滝山沢から滝山地区の電気柵の畑、及びその周辺を通り、源籐城神社まで北上するA2-85群を観察する。

12月27日 1パーティ6名で観察。源籐城神社から源籐城の電気柵の畑の出入り口周辺で長時間過ごし、夕方国道338号線を東から西へ横断。

12月28日 1パーティ5名が観察する。A2-85群は源籐城北部、脇野沢川右岸から南下し、片貝地区の電気柵を通り、滝山小学校北の農道を横断する。この横断時にベビー12頭を含む50頭をカウント。死角もなく完璧なカウントがとれる。

12月29日 調査をしなかった。

「 構 成 」

2001年12月28日 12:00~13:00

滝山小学校北、片貝地区の農道を横断するとき

オ ト ナ	♂	2	(ゴンズイ、カマス)
	♀	12	(ナス、ハギ、カズラ、コナス、タチフジ、ウルシ、アカネ、シロザ、ムギ、アンズ、ヌルデ、コムギ)
ワ カ モ ノ	♀	5	(ヤマフジ、スモモ、ナツフジ、ヤマハゼ、ヨモギ)
4 歳	♂	2	
	♀	1	(ナスビ)
3 歳	♂	2	
	♀	5	
2 歳	♂	1	
	不明	2	
1 歳	♂	4	
	♀	2	
ベ ビ ー	♂	7	
	♀	5	
合 計		50	頭

\* オトナ♂の18歳のイトウが秋から行方不明、右足の足首から先を欠損すると

いった個体識別に大きな特徴があるため、今後の情報に期待したい。

- \* ゴンズイは17歳、カマスは推定13歳、ウルシは14歳、ムギは12歳、アカネは13歳、タチフジも13歳、シロザは12歳、アンズは10歳、ヌルデは7歳、コムギも7歳、ヤマフジは6歳、スモモは5歳、ナツフジも5歳、ヤマハゼも5歳、ヨモギも5歳。
- \* 2001年に誕生したベビーの出産状況。カズラの♂babyが4月生まれ、ヌルデの♂babyが4月24日生まれ、タチフジの♀babyは4月25日生まれ、ムギの♀babyは5月上旬生まれ、コムギの♀babyは5月上旬生まれ、アカネの♀babyは5月15日生まれ、ナツフジの♂babyは5月16日生まれ、アンズの♂babyは5月17日生まれ、ヨモギの♀babyは5月25日生まれ、ヤマハゼの♂babyは5月27日ぐらいの生まれ、ウルシの♂babyは6月16日生まれ、コナスの♂babyが8月上旬生まれ。
- \* アンズの左目は完全につぶれてしまった。瞼を閉じた状態になっている。
- \* 秋、ゴンズイが左後ろ足を骨折したのか、左足を地面につかずに歩いていたが、ようやく治ってきたようで、4本足で歩くことが多くなっていた。
- \* 2001年11月18日、コナスに白色のテープの電波発信機が装着される。その後、発信機が外れ、若者ザルのヤマハゼに白色のテープの電波発信機が装着される。

## 『 A87群 』

12月24日 1パーティ3名が踏査。九艘泊道路サル橋北100m地点で左岸から右岸へ横断するA87群をフルカウントする。ベビー3頭を含む21頭を数える。

12月25日 1パーティ3名が九艘泊左岸斜面の道路工事現場付近から斜面を登り、ガンケ山から南に伸びる主尾根まで移動するA87群を追跡調査をする。

12月26日 2パーティ4名がガンケ山から南に伸びる主尾根の東側(瀬野川側)で群れを発見し、瀬野川上流部から北上し、ガンケ山南まで移動する群れを確認する。東北遊歩道(中細間沢)でハナレザルと思われるオトナ♂1頭を目視する。

12月27日 1パーティ4名が入山。ガンケ山周辺、東北遊歩道、自動車道路(滝山側)を中心に踏査したが、足跡を確認しただけで群れの目撃はなかった。

12月28日 1パーティ4名が九艘泊側新設道路、滝山側新設道路、ガンケ山周辺と踏査するも群れの目撃はなかった。ただ、道路工事現場でハナレザルと思われる右目の下に白いしみのあるオトナ♂1頭を観察。

12月29日 1パーティ2名がガンケ山周辺の主なる尾根を踏査したが群れの発見はできなかった。ただ、昨日観察したハナレザルを再び確認した。

「 構 成 」

2001年12月24日 12:05~14:30

九艘泊自動車道路、サル橋北100m地点を左岸から右岸へ横断するとき

オトナ	♂	2	(イッカクを含む)
	♀	3	(クルミ、ワラビ、アケビ)
ワカモノ	♂	1	
	♀	3	(クルミン、コゴミ、コクワ)
4歳	♀	1	(シドケ)
3歳	♂	1	[クルミの子]
	♀	2	[サクラの子、アケビの子]
2歳	♂	2	[クルミの子、ワラビの子]
1歳	♂	2	[サクラの子、ワラビの子]
	♀	1	[アケビの子]
ベビー	♂	2	[コゴミの子、アケビの子]
	♀	1	[コクワの子]
合 計		21	頭

\* 2001年12月10日、九艘泊地区の墓所近くの道路で、クルミンの♂のベビーが交通事故死。

\* イッカクは16歳ぐらい、もう1頭のオトナ♂は20歳以上、ワカモノ♂は8歳でホホッチとも呼ばれている。クルミは推定19歳、ワラビは11歳、アケビは8歳、コゴミは6歳、クルミンも6歳、コクワは5歳となっている。

\* 2001年11月25日、コゴミに黄色のテープを巻いた電波発信機が装着される。

『 O群 』

12月24日 1パーティ3名が青石から面木へ続く海岸線の尾根、ピーク300.7の西側でO群を発見。北西方向の海岸線側に移動、面木南まで観察。

12月25日 1パーティ4名が面木林道より南の海岸線側でO群を発見。その後、尾根を越え面木林道南の斜面に広がる。尾根越え時にベビー4頭を含む54頭+αをカウント。

12月26日 1パーティ6名が面木林道南側の右岸斜面、ピーク300.7の北側斜面に広がるO群を終日観察。

12月27日 1パーティ4名がピーク300.7北側斜面から尾根を南に越え、青石左岸の枝尾根中腹まで移動するO群を観察。

12月28日 1パーティ5名が入山。O群が青石左岸から南下し、青石林道を広い範囲で横断、穴間林道との間のスギ植林地まで移動したことを観察。青石林道に55頭分の足跡を確認。

12月29日 1パーティ3名が穴間林道の出会いからやや北から観察開始、穴間林道沿いに西へ移動、林道の車止め付近を北へ移動する姿を確認し、観察終了。

### 「構成」

2001年12月25日 10:52~13:20

面木南の尾根上、西から東へ尾根越え時

オトナ	♂	5
	♀	4
	不明	8
ワカモノ	♂	5
	♀	3
コドモ	♀	2
	不明	2
ベビー	不明	4
足跡		1
合計		54頭+α

\* 死角になっていた場所でコドモ1頭分の足跡を確認したため構成に加えた。

\* 2001年11月28日、オトナ♀に白地に赤色のテープで巻かれた電波発信機が装着される。この♀をクワと名付ける。

### 『B群』

B群については、1999年の調査から、国道338号(海峡ライン)を北上し大荒川流域までの地域と、川内町の男川・宿野部川流域の2地域を調査している。今回の報告では、それぞれの地域ごとに結果を記載する。

### 【 海峡ライン方面 】

12月24日 2パーティ4名が、国道338号線の海峡ラインの石碑までと源籐城林道、蛸崎越林道、武士泊、湯ノ沢岳南斜面を踏査するも、サル情報は得られなかった。

12月25日 1パーティ3名が、国道338号線を北上し大荒川林道入り口までと源籐城林道を踏査するもサル情報はなかった。

12月26日 3パーティ6名が、大荒川林道、長右エ門林道、湯ノ沢岳南斜面、武士泊林道、蛸崎越林道、源籐城林道、を踏査したが、サル情報を得られなかった。

12月27日 2パーティ4名が入山。1パーティ2名はスキーで大荒川林道と長右エ門林道を踏査、もう一つのパーティが湯ノ沢岳東を踏査、共にサル情報は得られなかった。大荒川林道は林道の終点まで踏査し、長右エ門林道の踏査については、同日牛滝地区からも踏査し、調査もれのない状況であった。

12月28日 一日空ける意味もあり、調査しなかった。

12月29日 3パーティ6名(1パーティ2名はスキーを使用)が大荒川林道、長右エ門林道、人切山から二股山への尾根を踏査したがサル情報はなかった。

### 【 男川・宿野部川・口広川流域方面 】

12月24日 1パーティ2名が男川流域(荒川越沢、西大家戸沢、滑川、松山沢)を踏査したが、サル情報はなかった。

12月25日 2パーティ3名が男川流域と口広川流域を踏査。口広川ではサル情報はなかったが、男川の板家戸沢出合いから弥五左衛門沢付近でオトナ $\alpha$ 1頭を含む2~3頭のサルを目撃する。

12月26日 1パーティ2名が男川の板家戸沢出合いで西から東へ移動する子ザル1頭を含む7頭のサルの足跡を確認する。

12月27日 1パーティ2名が男川流域、弥五左衛門沢まで踏査したがサル情報は得られなかった。

12月28日 3パーティ6名が、男川流域・口広川流域・宿野部川(西又沢林道、金八沢林道)を踏査。口広川と宿野部川流域にはサル情報はなかったが、男川の滑川と板家戸沢間の男川左岸で10頭+ $\alpha$ の足跡を発見。

12月29日 1パーティ4名が入山。男川流域の滑川西尾根で鳴き声と4頭分のサルの足跡を発見。近くにいたと思われるが、目視はできなかった。

\* 男川流域で目撃した2~3頭(12月25日)、足跡の情報では10頭+ $\alpha$ (12月28

日)のサルがB群と判断するだけの確信は持っていない。むしろ個体数の状況からB群から分裂したものの可能性の方が高い。ただ、ベビーと思われるような足跡や完全に子ザルの足跡が確認できたことで、少数ながらも群れのようなものである。2000年の冬季調査で♀ザル1頭を含む5頭のサルを観察していたが、同一の群れと判断できる。構成はとれてはいないが、12月28日に確認した足跡の状況を詳しく記しておく。

《 足 跡 》

2001年12月28日 男川中流部

大	5	大	6	大	3
中	2	中	1	中	3
小	2	小	4	小	3~4
ベビー(?)	1	ベビー(?)	1	ベビー(?)	1
<hr/>		<hr/>		<hr/>	
合 計	10頭	合 計	12頭	合 計	10~11頭

『 U群 』

12月24日 調査せず。

12月25日 1パーティ2名が、牛滝から福浦にかけて国道338号線を車によるパトロール。サル情報はなかった。

12月26日 1パーティ3名が、牛滝から福浦にかけて車でパトロール。福浦地区でZ-2群の一部と思われる7頭のサルを目撃、ただしU群の情報は得られなかった。

12月27日 2パーティ4名が入山。堂ノ沢、石山沢、長右エ門林道(牛滝側)を踏査するもサル情報はなかった。

12月28日 一日空けるため、調査をしなかった。

12月29日 3パーティ3名が、長右エ門林道(牛滝側)、堂ノ沢・滝沢・小荒川、野平地区南部(小助沢・新三郎沢)を踏査するも、サル情報はなかった。

\* U群は牛滝地区を中心に積極的に踏査を試みたが、群れの発見はできなかった。調査状況から、牛滝地区より北部にいたと推測できる。

『 ハナレザル 』

◎ 12月24日 七引橋南の国道338号線を横断するオトナ♂1頭を目撃。

- ◎ 12月26日 中細間林道でオトナ♂1頭を目撃。
- ◎ 12月28日および29日 九艘泊地区の新設自動車道路の工事現場で人馴れして右目の下に白いしみのあるオトナ♂1頭を目撃。

『 タイワンザル 』

調査期間中、調査範囲内でタイワンザルの目撃はなかった。

《 食べ物リスト 》

< 自然のもの >

マツ（種子、樹皮）・ササ（脇芽、葉）・ツリバナ（冬芽、樹皮）・ホオノキ（樹皮）・ツバキ（葉）・ケヤマウコギ（冬芽）・ヤドリギ（実、茎、樹皮）・イタヤカエデ（樹皮、冬芽）・ヤマグワ（樹皮、冬芽）・シロツメグサ（地下茎、葉）・カラスザンショウ（葉痕、樹皮）・イヌエンジュ（樹皮）・オオバクロモジ（冬芽）・ツタウルシ（冬芽、樹皮）・ツルアジサイ（冬芽）・アオダモ（冬芽、樹皮）・ブナ（冬芽）・ヤマザクラ（冬芽）・ミズナラ（冬芽、樹皮）・ツルウメモドキ（実）・マタタビ（冬芽）・サルナシ（樹皮）・クズ（種子、樹皮）・キノコ数種

< 畑のもの >

ハクサイ・カボチャ・ダイコン・キャベツ・長ネギ・赤カブ・稲

{ おわりに }

脇野沢村民家周辺に生息する3群（A2-84群、A2-85群、A87群）については、A2-84群が遊動域を東へ拡大させていることが挙げられる。これまでは国道338号線に沿った地域までが東の端だったのが、辰内沢まで移動した。個体数の増加や電気柵の設置による影響などが考えられるが、はっきりとした原因は分からない。また、それに伴ってなのか、どうかははっきりと分からないが、A2-85群も遊動域を東へ拡大している。これまで遊動域の東端が口広川河口部までだったのが、調査期間中の観察ではないものの、小沢地区の西側の畑まで侵出していることが確認されている。また、個体数が90頭近くになったA2-84群は近い将来分裂が予測できるが、その前兆なのか

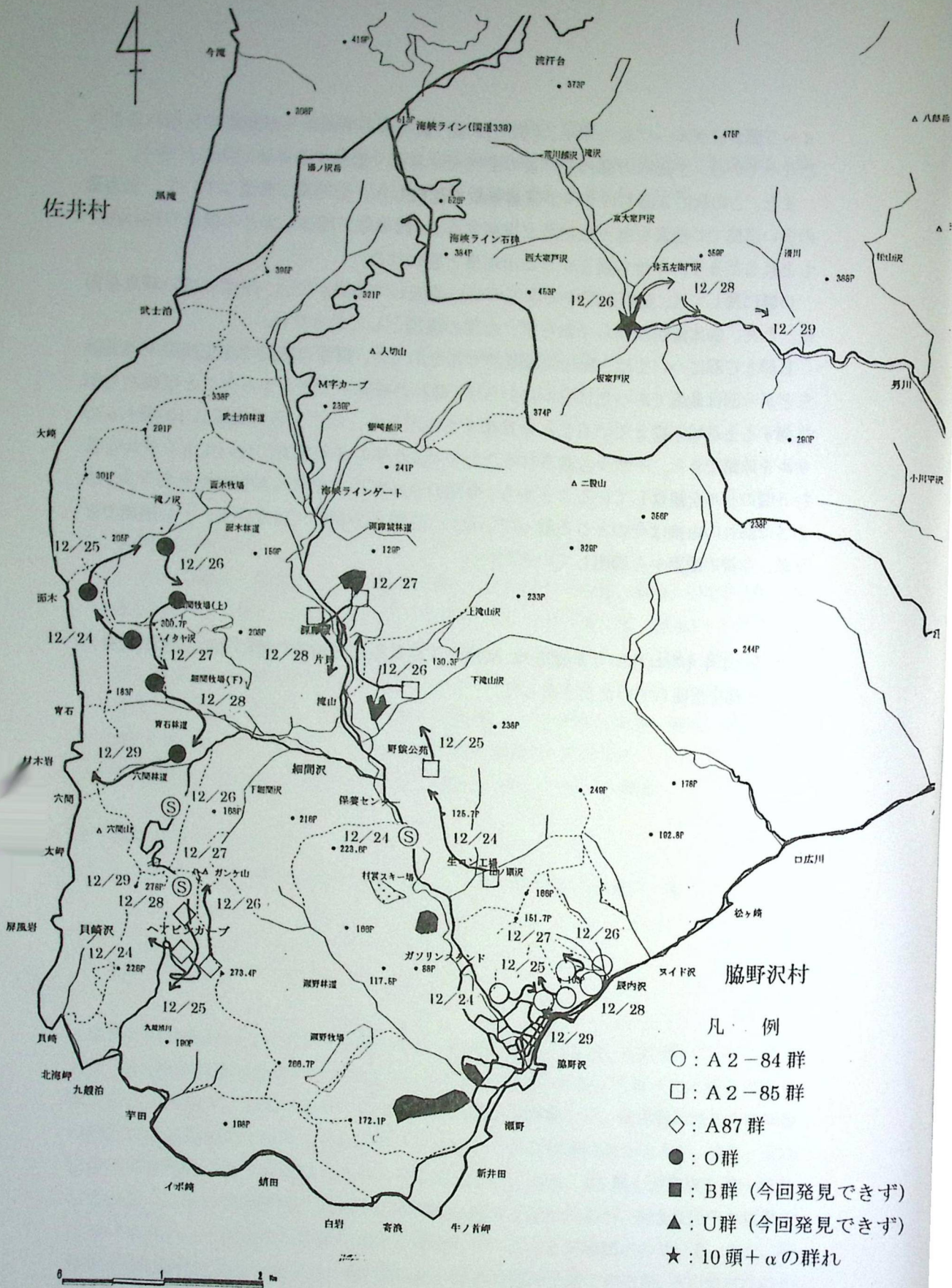
4～5頭がαグループをつくり、本隊とは別行動を取るサルたちが頻繁に見られるようになっている。これらの群れの今後の動向を注意深く観察する必要があるだろう。

また、この秋に3頭ものサルが交通事故で死亡した。交尾期で興奮していて、交通量の多い道路での注意を怠った結果と推測するが、個体数が増加し人との接点の現われととれるだろう。今後も起こりうる出来事と思われる。

O群に関しては、調査期間中の全ての日に連続して観察ができ、精度の高い結果を得た。ただ、個体識別は進んでおらず、今後の課題としておきたい。

B群とU群については、群れの確認ができなかった。積雪の状況や調査期間中の天候などが今回は最適であったにもかかわらず、群れの確認ができなかったことは私たちが推測する生息域を越えていることを意味するのだろう。ただ、男川流域に10頭+αのサルを確認できた。子ザルも含まれることや2000年の冬季調査においても♀ザルを含む5頭のサルを観察していることから、今回のサルが小さな群れと判断できよう。この小さな群れの由来は今のところ解っていない。B群の分裂群ではないか、とも推測できるが、今後の観察から解明していきたい。

☆ 2001年冬季ニホンザル調査は、京都大学霊長類研究所野外観察施設から調査費の一部を援助していただきました。



2001年 冬季ニホンザル調査結果

各群れの遊動ルート図

- 凡 例
- : A2-84群
  - : A2-85群
  - ◇ : A87群
  - : O群
  - : B群 (今回発見できず)
  - ▲ : U群 (今回発見できず)
  - ★ : 10頭+αの群れ
  - Ⓢ : ハナレザル
  - ⇒ : 足跡
- 数字は日付け

調査員

鈴木 邦彦・松岡 史朗・小堀 睦・植月 純也

今年の冬は、雪が少なく、雨が異常に多い年であった。そのため、補足調査を行った期間は、標高の高い所では積雪があったが、標高の低い所や林道上など雪のついていないところが目立った。そのため、足跡がつかず、情報収集には苦労した。

男川中流域で、2001年度冬の調査、2000年度冬の調査で確認されている男川に遊動域を持つ小さな群れを対象に補足調査を行った。男川流域では、群れを確認することができなかったが、海峡ライン上部（人切山の北側）で小さな群れを発見することができた。2日目は、この群れを中心に調査し、近くに遊動域を持つ群れとしてO群も平行して調査しようと試みた。海峡ライン上部で発見された群れは、2日間観察した結果、人切山の北側から人切山の西側まで移動。確認頭数は、足跡で9頭+ $\alpha$ 、目撃で6頭+ $\alpha$ であったが、ともに数え落としがあり、全体頭数までは確認できなかった。これまでに確認されているO群や男川の小さな群れ、1999年冬の調査時に確認された4~5頭の小グループとの関連は、分からなかった。

3月30日（曇り、標高の高い所は濃霧）

踏査ルートと結果

蛸崎越林道から二股山を經由し海峡ラインを下りる踏査ルート 《 松岡 》

13:20 海峡ライン上（人切山の北側、ピーク384の西側）で今日のものと思われる糞3個発見。すぐ、残雪の上に残された当日の足跡も発見（中2個、大7個の9頭分は確認）。雪がない道路があり、数え落としがあると思われる。足跡は、海峡ラインを東から西へ渡る。13:40-14:05 足跡の確認地点の西南西（ピーク321と足跡確認地点の間）、海峡ラインの山側斜面にて鳴き声と同時にサル5頭発見。性年齢クラスは、老メス1頭、2-3歳性不明1頭、オトナオス1頭、性不明のオトナ2頭。ただ、周りから鳴き声がしていることなどから、もっといる。群れは西へ移動。その後の情報なし。

その他の情報：海峡ライン上に古い糞を多数確認。蛸崎越沢中流でフキノトウの食痕1本分確認。周囲に多数のフキノトウがあるなかで1本だけサルが食べた模様。ピーク453から西へ伸びる稜線上（人切山へ続く尾根との分岐点近く）にてフキノトウ4個に食痕あり。

男川中流 《 鈴木・植月 》

松山沢から滑川沢に越える踏査ルートと、男川林道を中心に松山沢出合から荒川越沢出合

までに加え、弥五左衛門沢、西大家戸沢の踏査ルート。

松山沢にてフキノトウの食痕を 2 箇所確認。それぞれ 1-2 本確認。滑川沢では今年の食痕のないヤマグワ 2 本と食痕の全くないヤマグワ 1 本を確認。松山沢出合と滑川沢出合間の林道上に比較的新しいフキノトウの食痕を 2 箇所確認。合計 6 本分。その他、男川林道、西大家戸沢出合までにヤマグワの今年の食痕 7 箇所 10 本分、古い糞 5 箇所 10 頭分を確認。また、西大家戸沢でも古い糞 1 個を確認。

#### 口広川流域と小沢周辺 《 小堀 》

口広川流域（夏家戸沢は源頭部、ピーク 329 まで。権左衛門沢は最上流部まで）と小沢地区（深石沢、小沢川と小沢から男川下流部へ抜ける道路含む）の踏査ルート。

小沢に注ぐ深石沢で新鮮な糞 1 個を確認。糞はきれいな緑色をしていた。口広川上流、夏家戸沢源頭部で、古い糞 1 個を確認。

3 月 31 日（曇り、海岸線は小雨が混じる）

#### 踏査ルートと結果

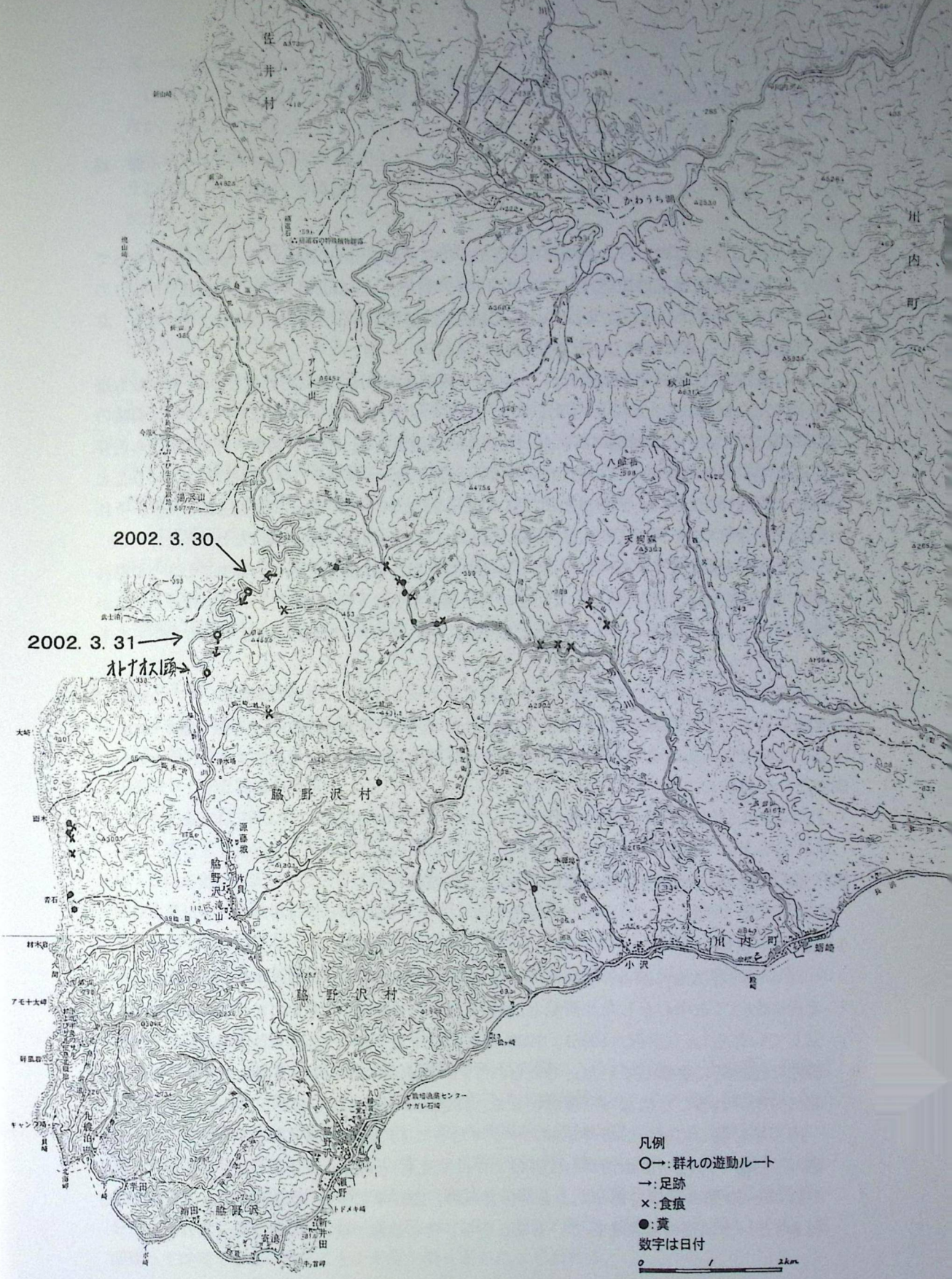
#### 人切山西側で昨日目撃した群れ 《 鈴木・松岡・小堀 》

9:15 サル 3 頭発見。場所は、M 字カーブの上方、人切山から西へ伸びる稜線の北斜面、海峡ライン沿い山側斜面。10:07 - 10:20 目撃できるサルは合計 6 頭。オトナメス 1 頭、オトナオス 1 頭、オトナ性不明 3 頭、1 才性不明 1 頭でプラス  $\alpha$  がいる。10:53 斜面上部から鳴き声。13:25 オトナ性不明 1 頭のみ再発見。M 字カーブに注ぐ沢。人切山から西へ伸びる稜線の南斜面。13:26 見えていた 1 頭が消失。14:02 ゴッゴッの声。先ほど（13:25-13:26）の目撃地点付近。14:30 調査終了。

#### O 群 《 植月 》

11:11-11:13 海峡ライン M 字カーブ、法面にて休息中(?)のオトナオス 1 頭を目撃。周りからは他個体の声、足音は聞かれなかった。サルは北東方向、低木の多い林の中に姿を消す。距離的に約 300m しか離れていないため、13:25-13:26 に発見したサルと同一とも考えられた。このサルの発見前（9:15-10:20）、昨日発見した群れがいた位置から約 600 m 離れている。昨日発見した群れのサルなのか、ハナレザルなのか不明。

O 群については電波が取れず、サルも発見できなかった。ただ、O 群の遊動域内、面木沢源頭部の稜線上に当日の糞 3 頭分確認（大、中、小、各 1 頭分）。踏査ルートは、細間林道（九艘泊川との境界尾根まで）、穴間林道、青石林道、面木林道、穴間から面木にかけての稜線上。



2002. 3. 30

2002. 3. 31  
 木下権蔵

- 凡例  
 ○→: 群れの遊動ルート  
 →: 足跡  
 ×: 食痕  
 ●: 糞  
 数字は日付

0 1 2km

補足調査結果



発見した群れの遊動ルート図とその他の情報

はじめに

1999年度に行なわれた下北全域一斉調査で、この半島のサル概要がだいぶ明らかになってきた。北西域(佐井村福浦以北)では、この10年の間に次々と群れが分裂し、遊動域がかなりのスピードで東や南への分布拡大している。電波発信器を利用して群れを判別してはいるが、非常に展開が早く、目の離せない状況になっている。

一方の南西域(佐井村牛滝以南)は、この20年来個体数の増加は見られるものの、群れ数も遊動域もほとんど変わらないという北とは全く対称的な状況である。それはそれで非常に興味のある課題なのだが、その問題の前にもっと基本的な謎がある。それは「脇野沢村細間沢から佐井村牛滝までの地域を遊動しているO群・B群・U群とは、一体どういう群れなのか」ということである。前回のまとめ(小林, 1999)ではO群とB群についてやや強引に結論を出したが、それからわずか3年の間に考え方を大いに変えなければならないような事態になってきた。

この地域を遊動していると考えられる3つの群れは、里山周辺を動くA群由来の3つの群れと違って山中を主な生活の場としているので、調査中も必ず発見できるわけではなく、とにかく情報量が少ない。しかしそんな『点』の情報でも、長い目で見れば『線』でつながるものもある。

今回のまとめでは、これらの群れのうち筆者がずっと注目してきたO群について、これまでの認識を正すことに重点を置いた。その為に過去40年にわたる調査の歴史を振り返りつつ、一体この地域で何があったのか、そして現状と今後考えられる状況とはどのようなことなのか、筆者なりに解釈してみた。

## 第一章 過去40年にわたる環境の変化とサルの動き

### 1、1955年以前

詳しい内容は他に譲るが、1930年前後の下北半島ではすでに個体群が大間町から佐井村北部にかけてを中心とした北西域と、脇野沢村から佐井村牛滝集落にかけての南西域とに孤立していたらしい(伊沢, 1995)。1900年頃には下北半島中央部から西部域にかけての広い範囲に連続的に生息していたと考えられていた群れが、その約30年後には半島の西部に南北に分断されることになった理由として、狩猟圧があげられている(三戸ほか, 1999)。

南西域に関しては、1945年以前にマタギたちに『穴間ザル』(九艘泊から穴間にかけて生息)と『荒川ザル』(武士泊から佐井村にかけて生息)と呼ばれた2つの群れがあって、それぞれ30~50頭の規模であったことが伝えられ、1957年に伊谷・徳田らが調査に入った時も「2群」という同様の結果を得ていることから、その状態が続いていたと考えられる。

## 2、第一の転機…1960年頃

1955年ごろから脇野沢川右岸流域では天然林の一斉皆伐とスギの植林が行なわれた(東ほか, 1988)。これによって僅か10年ほどで瀬野から面木沢流域までの環境が一変した。1960年には九艘泊集落にサルが出始め、畑を荒らすようになっていった。そして1963年3月に行なわれた海からの調査では、3つの群れ(A・O・B群)があることがわかった(伊沢ほか, 1984)。

『穴間ザル』と『荒川ザル』の2群と思われていた群れがなぜ3群になっていたのか。原因はまさに「天然林の皆伐」という環境変化によって、『穴間ザル』の遊動域内の天然林が海岸稜線にわずかに残る程度となってしまうことにあるだろう。また、サルの群れの分裂要因についてもっとも多いのは、「環境変化と採食場の変化による群れ内での人馴れ度による分裂である(伊沢, 1995)」といわれている。この広大な伐採をおこなうために森に入ってしまった人の数を思うと、2つの分裂の条件の両方に当てはまったのかもしれない。

こうして1963年の調査時には『穴間ザル』はA群とO群に分裂していた。後にA群は餌付けされて爆発的に個体数を増加させて遊動域を東や北へ求めていったが、O群のほうはその性格からか、海岸の僅かな森で以前と変わらない生活を続けていたと思われる。

一方の荒川ザルを取り巻く環境はというと、1963年に武士泊で発見された際にこの群れはB群と命名された。1966年には、後年南西域のサルたちに大きな影響を及ぼすことになる海峡ラインの工事が始まっている(開通は1979年)。しかし他に彼らの遊動域内で著しい環境の変化もなく、それまでと同じ暮らしであったと考えられる。

## 3、第二の転機…1980年頃

この時期に起こった様々な変化がその後の南西域のサルに与えた影響は大きい。ポイントは①海峡ラインと牧場の造成 ②餌付け群の分裂と捕獲 の2点である。

### ①海峡ラインと牧場の造成

最初の変化は1979年に開通した海峡ラインが、その後も整備を進めて1982年に国道に昇格したことであろう。海峡ラインの法面にはイネ科やクローバーが吹きつけられ、後年O・B群が食料の乏しい夏と冬に非常に執着するようになる。同じ頃(1983~85)脇野沢村では山奥に牛の放牧場が作られ(瀬野・細間・面木牧場)、海峡ラインと同様、新たな採食場を提供することとなった。また海峡ラインの完成によって大荒川流域へのアプローチが格段に便利になり、大荒川流域(1984年~)と長右エ門沢流域(1985年~)で林道工事が始まった。

### ②餌付け群の分裂と捕獲

1977年ついに100頭を越えたA群は1978~79年の間に3つに分裂し、その後も遊動域を東に広げ、猿害が深刻化していった。1982年にA1群が捕まり、その後も獲り残したサルをがいるという名目で捕獲は続いた。1983年の春から夏にかけては、A1群に代わって猿害を起こしていたほかの2群(A2群・A3群)のサルも捕らえられ、一部は出来たばかりの海峡ラインに投棄された(伊沢ほか, 1984)。このときの捕獲と投棄については詳細が分かっていない(既に捕獲許可が切れていたため、公にできない状況だったらしい)が、数頭獲っては棄てるといったことを何度も繰り返したと思われる。

このような混乱の中、1984年にA2群由来の21頭の群れが誕生し(A2-84群)、翌85

年に同じくA 2群由来の8頭の群れが確認された(A 2-85群)。また同じ頃、九艘泊周辺で発見された5頭ほどのサルもA群由来であり、1987年に群れと認められた(A-87群)。

この間、O群の個体数は多少の増減はあるものの20頭弱のほぼ横這いであつたらしい。遊動域も相変わらず穴間から大崎までの海岸沿いの稜線に限られていたと思われる。

一方、B群の遊動域(武士泊から大荒川まで)の海岸では、1983年頃に40~50頭規模の群れが見られるとの情報があり、B群は個体数を増やしていると考えられた。しかしこれは投棄されたサルの移入による一時的な増加だった可能性もある。また、1978年以降、小荒川流域では10数頭規模の群れが何度か見つかり、U群と命名された。この群れはB群とは別の群れと考えられた。

ただ、この時期はA群を取り巻く騒動のせいか、O・B群地域での調査はあまりなされていない。研究者らによるカウントもほとんどされていないため、本当のところ、これらの人慣れしていない群れがどのような状態だったのか分からない。1990年代の調査結果から、個体数や遊動域に急激な変化が起きるほどの影響はまだ出ていなかったのではないかと推測される。

#### 4、その後…1990年代

環境変化としては、1995年頃青石・面木間にある300pの北西側斜面が伐採され、同じ頃に細間・面木両牧場の周辺でも伐採があり今も続いている。脇野沢村では1994年から電気柵が普及し、今やほとんどの畑に設置されている。気候は暖冬気味となり、12月に行なわれる冬の調査期間では雪の少ない年が続き、全くない時もあった。

サルの方では、集落周辺のA 2-84群・A 2-85群・A-87群の個体数が増加して猿害もひどくなっていったが、電柵が普及し始めてから被害は減少し、現在は殆どない状態になっている。しかし個体数は相変わらず増えつづけ、遊動域も新たな展開を見せ始めている。一方、O・B群の遊動域内では、1990年頃より牧場や海峡ラインの法面での採食が見られるようになり、特に夏冬の調査時には重要な搜索ポイントとなっていった。暖冬がこういった場所への依存に拍車をかけたことが推測できる。

南西域個体群の北端にあった牛滝集落では1989年から数頭のサルが出没し始め、1991年には群れが出るようになった。また、90年頃から武士泊-牛滝間では50頭規模の群れの情報はなくなり、30頭ほどの群れと小グループが見られるようになって、B群とU群は完全に異なる群れと考えられた。そして穴間から武士泊の間で30頭ぐらいならO群、50頭ぐらいならB群、牛滝周辺ではU群という群れ判別が定着してきた。しかしこの考え方が浸透してきたここ数年、多くの調査員がこの地域を綿密に調べても、何故か1~2群しか見つからないという状態が多い。一方、1997年頃からは穴間から武士泊にかけて40頭ほどの群れが見られるようになる。当初はその規模を持つ群れはB群であると思われていたので「B群が南下している」と解釈され、調査員はかなり細かくO群のいそうなところを捜した。が、なかなか「これはO群である」と決定できる群れは見つからなかった。

もう一つこの時期で重要なことは、それまで下北半島では南西域、北西域の2つの個体群であったサルの分布が、90年代の半ば頃に北西域の最南端にいた群れの南下によって、「『下北個体群』という一つの個体群になった」という認識に変わったことだ。しかし、調

査の歴史などの違いから、本文中ではかつての『南西域』『北西域』というかつての個体群名を使うことにする。

以上、駆け足でこれまでの経緯を振り返ってみたが、1～3については、かつての群れの状況を復元した伊沢氏の報告(伊沢, 1995)などを元にまとめた。また4以降については、下北半島のサル調査会で出している年次報告書やO・B群についてのまとめ(小林, 1999)に基づいている。しかし最近の調査結果から、今回の主題であるO群については、従来考えられていたことと実際は少し違ったのではないかと思われる節がある。

それゆえ、1～3を前提として、1990年頃からO群の歴史を整理しなおしてみる。

## 第二章 1990年代前半に変化の兆し?

### 1、牧場の利用がはじまったのは?

第一の転機によってO群はA群と袂を分かち、皆伐を免れた僅かな海岸線の地域でひたすら人を避けて細々と暮らしていた。この状態は20年ほど続いたが、1983年頃から作られ始めた放牧場によって彼らの生活は変わり始めた。海岸の稜線沿いで生活していたO群が、距離にして海岸と集落のほぼ中間にある面木牧場や細間牧場まで遊動するようになったのには、A群由来のハナレオスの影響を無視するわけにはいかないだろう。また同じ頃、A群由来の3つの群れは捕獲騒動で混乱していた。海峡ラインに投棄されたサルにしろハナレザルにしろ、何らかの影響がO群にもあったはずだ。

調査中に初めて牧場でO群と思われる群れが見つかったのは1990年12月で、この時は面木牧場で12頭が目視されている。実はこの前年の3月に宮城教育大の岩沼氏らによってO群の調査が行なわれ、その時は牧場にサルの痕跡はなかったのだが、同氏は牧草食いのおこる可能性を指摘している。牧場が出来てすぐの80年代後半には牧場を利用していた記録がなく、この発見後の90年代前半の調査でも牧場周辺で見つかった記録が少ないことから、おそらく彼らは1990年前後から少しずつ牧場を利用し始めたのであろう。海岸から僅か1km内陸に入っただけの牧場の利用が確認されるまでにかかった年月と、初めて見つかった牧場が面木牧場というのも暗示的だ。ここは集落から離れていたせいも、牧場として使われた形跡がほとんどない。長年人を避けて山中で生活していたO群が、人造物に最初の一步を踏み出すには妥当な場所だったのではないだろうか。

ただ、相変わらず人と距離をおく群れの性質や、遊動域が山中ばかりだったこと、また当初は情報が点になりがちだったことから、全体像が掴みきれなかった部分は否定できない。調査のたびに「O群か、B群か」という識別が問題になり、その時にB群との区別で優先されたのは「個体数」(表1)だった。また最初に海峡ラインを利用していたのがB群だったこと、当初のO群の遊動域からは外れていたことなどから、当然海峡ラインを使っているのはB群であろうといった固定観念が、誤解を招く一番の原因だったと思う。O群の場合、個体数も遊動域もかなり変化していたのに、1997年以降細間林道周辺で40～50頭の群れが見つかった時も「B群が南下している」という、やや強引な解釈をすることになってしまった。

表1 98年時点で考えられたO・B群の概要

	O群	B群
個体数	30頭前後	50～60頭
遊動域	九艘泊集落北側から細間牧場・面木牧場を経て、北は滝ノ沢までの平館海峡に面した地域	細間林道から細間牧場・面木牧場・蛸崎越沢周辺を経て、海峡ラインを含む平館海峡に面した地域だが、北限は不明
重複地域	細間林道から面木牧場まで	

## 2、『牧場』から『海峡ライン』へ

そもそも、「O群は変化していない」と考える方が誤りであったのと思う。

何より人慣れした3つの群れ全てと隣り合っており、この3群由来のオスとの交流も多かったであろう。筆者もまだ「O群はすぐ逃げる」というイメージでいた93年の冬の調査の際に、6才ぐらいのオスが全く人を恐れていないのに驚いたことがあったが、彼もおそらく人馴れした群れ出身だったと思われる。そういったハナレオスによって、群れはより人里に近い内陸の牧場へ、さらには海峡ラインの法面へと遊動域を広げ、人にも慣れていったのだと推測できる。

とにかく1990年以降、食物の少ない夏と冬に確実に食べられる場所として利用されるようになっていったことは確かだ。面木牧場での発見後、1994年12月の調査で下の細間牧場での発見があった。海峡ラインについては後述するがおそらく1996年ごろに利用が始まったと思われる。

本調査会の夏冬の調査期間は、O群にとっては非常に微妙な時期に当たっていて興味深い。夏はそもそも食べ物がそこら中にあるわけではない。花の時期は殆ど終わり、実の時期にはまだ早くて、でも葉は既に固く、あるのはイチゴ類と多少の早くなる実ぐらい。それもやませが続いて冷夏だったりすると、実の成りが遅れたり量が少なかったりする。特に調査期間である8月上旬は下北半島では晩夏にあたり、イチゴのある伐開地とクローバーやイネ科のある牧場や法面には集中する。冬季調査中である12月下旬はここ10数年の暖冬で、本来なら雪のつきやすい牧場や法面でもそれほど積もらなかったりすぐ溶けてしまったりで、クローバーやイネ科の採食がより容易になっている。偶然ながら非常に似たような場所を使う時期となっている。

こうして調査中の牧場での発見は、1990年代前半ではあつたりなかつたりだったが、1996年頃からはほぼ必ず利用している。また遊動ルートも少しずつ東に寄るようになっていった。

同じ頃、個体数も増加してきたらしいが、これには検討を要するので詳細は次章にまわす。個体数の増加があつて遊動域を変える必要があつたのか、牧場などでの採食が可能になって個体数が増えたのか、ほかにも様々な変化の要因があつたのかかもしれないが、とにかくこの90年代前半に変化の下地ができてきたように感じられる。

ところでO群ではフルカウントが難しく、ましてや性別年齢構成の情報を正確に得られる状況がほとんどなかったが、出産可能なメスが1頭加わることで群れが大きくなるという興味深い例がある。O群の南隣にいるA-87群は、発見された85年から94年までずっと10頭未満の群れであつたが、その間にメスのアカンボウは90年と93年に1頭づつ生ま

れただけであった。しかし90年生まれのメスが95年に出産した頃から、それまではほとんどのアカンボウがオスだったのにメスが増え始め、それと同時に個体数も増加して、97年には一気に19頭になってしまった(表2)。いまだにアカンボウはオスのほうが多く、また周囲を大きな群れに囲まれているせいも、個体数も遊動域もここ数年は安定しているようだ。しかしこの群れの遊動域内では10年ほど前から、自動車道路が新設されて法面が作られたり伐開地が出来たりしていて、群れもよくそこを利用している。そういったきっかけでも群れは大きくなれるという一例にはなるだろう。O群でも同様の現象があった可能性はある。

表2 A-87群の個体数推移

年	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	
個体数	5	5	9	9	9	8	8	8	8	9	12	12	19	19	19	21	24	
出産可能なメス	2	2	3	3	3	3	3	3	3	3	4	4	4	5	5	6	6	
アカンボウ	総数	1	0	4	0	2	1	1	1	2	0	3	1	2	3	2	3	4
	オス	1	0	4	0	1	0	1	1	1	0	1	0	1	1	2	2	3
	メス	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	2	1	1	2	0	1	1
	不明	0	0	0	0	1*	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

注) \*は死亡個体

また、「B群の南下」という考え方も個体数だけに重点を置いた無理な考え方であったと思う。既にO・A2-84・A2-85・A-87といった4つの群れがひしめき合っている狭い地域へ、わざわざ割り込まなければならないような事情はB群にはなかったはずだ。B群の遊動域内では大荒川・長右エ門林道が作られたものの、かつての脇野沢川右岸のような大規模な伐採はなかったし、B群とA・O群など4つの群れとは、前述したような『穴間ザル』『荒川ザル』が元になっているとすると出身母群がまるで違う。同じ群れから分裂したならともかくそうではない群れで、しかも北も東も空いている状態にもかかわらず、混んでいる地域に進出するであろうか。

以上のような点を考慮すると、これまでB群と思われていた情報もO群であった可能性が出てくる。特に海峡ラインのM字カーブ付近より南で見つかった群れについては、慎重に見直す必要が出てきた。その結果、1995年に武士泊からM字カーブにかけて発見された群れはB群である(O群は別の場所で同日に見つかっている)が、翌96年にほぼ同じ場所で見つかった群れについては、ある理由からB群ではない可能性が出てきた。

### 第三章 目に見えて変化してきた1990年代後半

#### 1、修正の起点は1996年?

今回、これまでの解釈をすっかり切り捨てて考え直してみると、全く違うO群の顔が見えてくる。まず1996年の冬の調査中、海峡ラインで37頭のサルがカウントされた時に、

現在O群で個体識別されている『ブナ』(アダルトのメス、右鼻が切れている)らしいサルが確認されている。当時この群れはB群とされていたが、この調査中にO群は見つからない。こういった特徴は同じものはなかなかないので、おそらく同じ個体であろう。

とにかくこの海峡ラインにいたサルをO群だとすると、重要な点が二つある。1点目はこの時点で個体数が40頭ほどになっていたこと、2点目はO群が海峡ラインを利用しているということである。特に1点目の個体数については、翌1997年7月に穴間・青石林道の分岐で松岡氏らが40頭をフルカウントしていたり、同じ97年12月にも下の細間牧場で36頭強をカウントしている(この調査ではB群らしいサルが武士泊の北で見つかったので、O群が1996~97年の間に40頭規模の群れになっていたのは確実である。

また、2点目については1996年夏の調査時に海峡ライン周辺にいた14頭強のサルもB群ではない可能性も出てくる。しかしこの時は穴間から武士泊まで稜線でメスを含む数頭の群れが何回か見つかり、これがO群で海峡ラインにいたのがB群なのか、それともO群の一時的な分派なのかどうか、決め手にかけるところがある。北西域のサルは頻繁に分派行動をとる(足澤、1975ほか)ようだが、南西域では今のところはっきりいえる分派は一例しかない(1994年冬季調査でのA-2-85群)。当時の夏の調査では、山中の踏査は4時頃に終了することが多かったが、実際サルは早朝から夕方6時過ぎまで動くので、情報が点になりがちであった。しかしそれだけではなく、この1996年はO群にとっての転機であったかもしれない。なぜなら夏にしる冬にしる、この年までにO群らしい群れが海峡ラインを利用したという情報はなかったが、これ以後の調査では牧場や海峡ラインの法面でほぼ必ず群れが見つかるようになったからだ。

筆者には、1996年8月に海岸稜線にいた8頭強のサルたちは分派群で、昔からの遊動域に頑なにこだわる、O群の中でも最も保守的なグループであったような気がしてならない。

## 2、1998年冬の再考

1998年12月に予備調査を含めて細間牧場から武士泊の北まで12日間に渡って群れを追跡し、56頭強をカウントしている。これが「B群ではないか」という最大の誤解となった個体数で、このあと必死に「O群」を探したところ、穴間から面木にかけてで18頭強の群れが見つかってしまったので、二重に誤解することとなった。しかしこの時はA-87群が調査初日しか発見できなかった(それも声のみ)ので、18頭強の群れがA-87群であったとは考えられないだろうか(但し、A-87群の北限は青石付近と考えられている)。また56頭は前年の40頭から比べるとあまりにも多いように思うが、構成としてはアカンボウが5頭含まれる上、ワカモノからオトナのオスが多く、しかも彼らが非常に人馴れしていたので、A群由来のオスが交尾期にO群と共に動いていた、一時的な現象と考えられる。それが証拠に以後は40~50頭を推移し、オスが目だつて多いということもなくなっている。

## 3、1999年夏の再考

合わせて1999年夏の結果も整理しておこう。東北が猛暑にみまわれた年で、サルが早朝と夕方しか動かず、調査もサルに合わせて早朝から夕方遅くまで行なうきっかけとなった調査である。

穴間林道の車止め付近で見つかったO群は細間牧場を経て北上し、発見から3日目に面

木牧場を通過した。当時そのまま面木牧場の西に停滞していたと思われた(最終確認 13:20)が、実際はその日のうちに武士泊林道に達していたと考えられる。なぜなら翌日の早朝に海峡ラインのM字カーブ付近で27頭以上の群れが確認されているからである(この群れは当時の報告書ではB群としていたが、見失った時間と移動方向からO群と考えられる)。サルは武士泊林道を4時間もかけて渡り、そこで見失って30分後に338ピークの南の谷で群れを見つけている。そして翌日南下し、青石林道で夕方遅くに44頭カウントをカウントしている。この群れが青石周辺を移動していたときに、面木牧場から武士泊林道入口にかけて数頭のサルが目撃されているが、このグループではメスやアカンボウが確認されていない。報告書では強引にO群とB群とに分けたが、これまでの経緯から338ピークから青石林道へ南下した群れがO群で、数頭のサルはハナレザルと解釈する方が自然であるように思う。前年から考慮するに、暮にO群と共に行動していたオスグループという可能性もある。

#### 第四章 O群の全容

長々と述べては来たが、O群の現状を整理すると以下ようになる。

##### 1、個体数

1990年から今年度まで、ほぼフルカウントと考えられるデータ、或いは構成がある程度取れているデータをまとめた(表3)。90年代前半はまだ遊動域もどちらかという海岸線に近かったせいか、フルカウントが難しく精度も今一つな部分がある。しかし後述するように遊動ルートがかなり分かってきたことと、牧場や海峡ラインに出るようになって林道や国道を横断する機会も増えたことで、カウントのチャンスもかなり多くなった。

この表からは1993年頃に約20頭、1996年頃には30頭を越えて1997年には40頭に達したらしいことが伺える。また1997年には少なくともオトナのメスが10頭はいて、それ以後はアカンボウも5頭位ずつ生まれている。個体数が減少する要素がないので、多少の増減はあるものの全体としては増加の傾向にあるといえる。現在は昨年夏のフルカウントから、51頭という状況である。

##### 2、遊動域とその季節性

遊動域の変遷をまとめると1990年頃面木牧場を利用し始め、1994年に細間牧場、1996年に海峡ラインと東へ徐々に遊動域を広げている(図1)。そしてついに、それまでは海峡ラインを東側に渡っても殆ど道路際から離れなかったのが、1999年の冬には武士泊林道入口付近で東に渡ってそのまま南下を続け、上滝山沢まで達した。さらに2001年夏には浄水場付近を東に渡って南下し、下滝山沢林道の南まで達した。滝山、片貝、源藤城の集落の中を突っ切らずに、わざわざ回っていくあたりがO群らしいが、今後の動きが非常に興味深い。

また季節による遊動の違いもはっきりしている。定期調査は夏と冬だが、筆者が個人的に行なっている春の調査での結果は夏冬と全く違う。どの時期も調査はほぼ同じ日程で行

表3 O群の個体数と構成の変化

	オトナ		ワカモノ		コドモ		アカンボウ		年齢?		合計	+α	カウント地点	個体識別
	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	性別?	年齢?				
90/12	2	6	1				3		1	4	17	不明	大崎の尾根上	
93/12	2	3	3	2	1		3		1		15	4~5	穴間~面木までの海岸沿いの稜線	
94/8	2	4	1	2			3~4		4		17~18	不明	滝ノ沢林道	
95/8	1	5~7	1				9	2	1	2	21~23	2~3	面木牧場から滝の沢へ	
95/12	3	1		1	1		2		1	19	28	不明	穴間林道の中細間との分岐の斜面	
96/12	2	8	1		2	1	1	1	2	19	37	なし?	武士泊林道	ブナ?
97/7 *1	4	10							3	23	40	なし	細間林道の青石・穴間分岐手前	
97/12	3	6	9	1	7	1	6		2		36	4~5	下の細間牧場の道路	
98/12	5	12	4	1	2	2	4	16	5	5	56	少ない	滝ノ沢林道	
99/8	2	7	6	1	12	1	6		7	1	43	数頭?	青石林道	
99/12	6	8	1	2	4	3	2	8	1	3	50	少ない	面木牧場	
00/2	4	7	1	5	2	2	12		1	2	40	10	海峡ラインゲート北	
00/7		1							6	44	51	不明	武士泊林道	ブナ
00/7	1	1								45	47	不明	海峡ライン	ブナ
00/8	1	7	2		1	4		15	6	2	38	不明	滝ノ沢林道	
01/8	2	12	1	8	3	2	4	11	1		51	なし	国道338号線木材工芸センター付近	ブナ
01/12	4	5	8	3	5	12	2	10	4	1	54	不明	面木の稜線	ブナ クワ(発信器 装着個体)

注1) 調査は\*1松岡史朗、無印 下北半島のサル調査会

注2) カウントはここに挙げたもの以外に何度も行なわれているが、頭数のみのものや+αの多いものは省略した。

なっていて、言わば時間の定点調査のようになっているので比較すると面白い。春の調査を本格的に始めた1999年から3年間の違いを以下にまとめた。

夏季調査時(8月上旬)…基本的には放牧場と海峡ラインの法面を中心に動く。しかし猛暑であった1999・2000年は早朝と夕方しかそういった開けたところには出てこなくて、日中は木陰で涼んでいることが多かった。暑さ以外の環境の変化はほとんど受けられないようである。図2の通り、遊動ルートは集中している。

冬季調査時(12月下旬)…秋の堅果などの実の成り具合や積雪量、風向で利用場所はかなり変わる。この時期は北西風が吹きつけることが多いので、西を向いている海峡ライン法面や海岸側斜面は風があるときは利用しない。1999年はまさに風の影響を受けていた。しかしブナが豊作だった2000年は強い北西風の中、海岸に沿った稜線で一心にブナを拾い、牧場や法面には一回も寄らなかった。最近の12月にしては雪の多かった2001年は牧場や法面の積雪が多かったのか、ほとんど二次林を利用していた。因みに1998年は暖冬でそれほど雪がなかったためか、一週間ほど細間牧場周辺に居座っていたこともあった。図3の通り、遊動ルートは様々な条件により分散している。

春季調査時(4月下旬～5月上旬)…ちょうどブナの芽吹きと重なり、群れは海岸の稜線にあるブナを中心に南北に移動する。天候が不安定なこの時期は風の影響を受け、やませが吹いている間は海岸側斜面を利用することが多い。図4の通り、遊動ルートは集中している。

この季節の違いから、夏冬は確かに牧場や海峡ラインの法面がポイントとなるが、依存度は夏の方が圧倒的に高く、冬はむしろ様々な要因で利用の度合いが左右されるということの指標になることがわかる。また春の動きから、より東の地域を利用するようにはなったものの、以前の遊動域から離れているわけではなく、状況に応じて場所を使い分けているらしいことが伺える。

### 3、個体識別

第三章で述べた右鼻のかけたメスは、1999年春に確認された同様の特徴を持った個体であると思われる。そしてこの後、連続して見つかるようになり『ブナ』と名付けられた。

ブナは初老のメスで、声もしゃがれている。現在のO群にはブナと同じ位の年のメスがもう一頭いて、こちらは体に特徴はないが、声はブナと非常によく似ている。しかし、この2頭が一緒にいるところは見たことがない。もちろん見ている範囲でだけではっきりは分からないが、移動の時に群れの先頭と後ろから唵れ声が聞こえることがあり、お互いに距離を置いているような感じさえる。

こういったことが分かるようになってきたのも、連続して追えるようになったからだと思う。これに、正確な構成が取れるようになれば、次の変化の兆しにもいち早く気付くことができる。何よりここ数年でブナが連続して発見されていなかったら、O群はまだ誤解したままだっただろう。

#### 4、その他に

1999年冬に○群が面木牧場を通った時に、彼らが牧場の山際に大量においてあった白っぽい物を夢中で食べているのを見た。後で調べてみると、何と全てジャガイモであった。誰かがクズ野菜として棄てていったらしいのだが、山のものしか知らないはずの彼らがジャガイモの味を知っていたということが驚きであった。実はその前年にもジャガイモは棄ててあったのだが、その時には私が見ている範囲では食べているサルはいなかった。結局、予備調査中に2日間、さらに4日後の定期調査中にも2日間、面木牧場に戻ってきてジャガイモに執着した。

どの群れの出身のサルが教えたのだろうか、とにかくこういうことの積み重ねが○群を変化させたのだろう。

### 第五章 これからの課題

#### 1、○群の課題

この数年で○群は全容がかなり分かってきた。識別個体の『ブナ』の確認によって群れの決定がしやすくなったのは大きい。この群れは構成まで含めたフルカウントを定期的に行なうようにすることと、連続した遊動ルートを得ることが重要であろう。特に最近利用するようになった脇野沢村(小沢地区を除く)の東側は、まだそれほど利用頻度の高い地域ではないようだが、今後どのように利用されるのか注目したいところである。またそこはA 2-85群が頻繁に使う地域でもあり、どちらも現在50頭規模、個体数の増加時期もほぼ同じなので、そのあたりの双方の群れの動きが今後面白くなりそうだ。

もっと大きな変化の兆しもある。昨年暮の調査で、いつもは本村の西側を遊動しているA 2-84群が、本村東の八幡宮付近に停滞していた。そのせいか、本村から源藤城までの南北の遊動をするA 2-85群は、源藤城から田ノ頭沢までしか動かなかった。A 2-84群は80頭を超える大所帯であり、脇野沢周辺の群れで現在、最も分裂の可能性のある群れである。しかし彼らの遊動域は二方を海、他の二方をA 2-85群と○群に囲まれていて、身動きの取れない状態にある。もし彼らがその大所帯を支えるなり、分裂なりをするために新たに遊動域を広げようとする、どちらかの群れの遊動域を突破するか、押し出すかしなければならぬ。今後、この群れの動きがA 2-85群・○群どちらにも、直接か間接かの違いはあるだろうが、影響を与えることは必至である。

また、これはA 2-85群でもいえることだが、○群も50頭を超えたことで分裂を考慮に入れねばならないであろう。分裂は『60~70頭』が目安と言われるようだが、これは地域や環境によってかなり違って、50頭ほどで分裂する場合もある。またこのサイズになってくると、毎年生まれるアカンボウの数も増えてきて、個体数が急激に大きくなっていく。そしてA 2-84群と違うのは、どちらの群れも今のところ遊動域の東側は空いているということだ。その先触れのように近年、脇野沢村で唯一サルの情報がなかった小沢地区でも、数頭のサルが畑を荒らすようになっている。

そんな中、昨年暮に新たな展開があった。A 2-84群・A 2-85群・A-87群・○群それぞれ群れのオトナメスに1頭づつ、電波発信器が取り付けられたのだ。これによって

定期調査以外の季節の情報も手に入りやすくなり、遊動の変化がいち早く察知できるようになった。個体数を増やしながらかぶられている状態のA 2-84群と、かぶをしている側のA 2-85・O群。東へ拡大するのは一体どの群れか、それともその前に分裂があるのか。そこにB群やA-87群はどのように関わってくるのか。今後の展開が非常に興味深い。

## 2、謎の深まるB群・U群への影響

一方早急にとりかからねばならないのは、B群の解明である。今回のO群の見直しによって、この10年余りのB群の情報がいかに少なくて曖昧かが浮き彫りになったように思う。両群を簡単にまとめると以下ようになる。

### ●O群

個体数；51頭(2001年8月現在)

遊動域；南は九艘泊のヘアピンカーブから、北は湯ノ沢岳の南まで。また源藤城・片貝・滝山集落を除いて東は源藤城林道・上滝山沢・下滝山沢まで。

季節性；春先は海岸の稜線を中心に動く。夏と冬は細間・面木両牧場、海峡ライン・穴間-九艘泊間の新設道路の法面、伐開地などを遊動する。但し冬は様々な条件によって遊動が変化する。

### ●B群

個体数；30～50頭くらい？

遊動域；南は武士泊から、北と東はよく分らない。

季節性；全く分かっていない。

### ●両群の遊動域の重複地域

武士泊周辺？

そもそもB群の遊動域を含む武士泊から牛滝にかけては、海峡ラインが出来ても大荒川・長右エ門林道を作り始めた後も、かつて脇野沢であったような広範囲にわたる皆伐は行なわれなかったし、今も殆どない。また1990年代前半の調査結果を見ると、海峡ラインの法面も現在のO群ほどには依存していなかったらしい。つまりサルを変化させるような要因がないのだ。一章で述べたように1983～89年頃の間には、50頭ほどのサルを海岸で目撃したという漁師などによる数件の情報が寄せられが、1990年代に入ると50頭もの群れの情報はなくなった。逆に30頭ほどの群れが海峡ラインの武士泊周辺や牛滝で発見され、また1980後半～1990前半の間に小グループが牛滝や蛸崎越沢、上滝山林道などで見られるようになる。その頃にはこの地域にはB群とU群がいるという考え方が浸透してきていた。

残念ながら、1980年代に50頭ものサルが研究者らによってカウントされたことはなく、本当に50頭もいたのかどうか詳しい状況はわからない。しかし90年代のB群の確定はこの『個体数50頭規模』にかなり振り回された。確かに前述したようなA群の捕獲したサルの投棄があって、一時的に増加した時期もあったであろう。が、近年の調査では、武士泊から牛滝までの間を機動力と経験を積んだ多くの調査員で綿密に捜しても、また周辺を広く調査しても、50頭規模の群れも分派や分裂したらしい群れも見えない。さらには1999・2000の2年間、夏も冬も調査の時に群れが見つからなかった。牛滝では調査中

以外の時期に時々群れの情報があったので一群れはいることが分かっているが、何しろこの地域には集落がここしかなく(もちろん人にとってもサルにとっても、それでよかったと思うが)、当然目撃情報が少なくなる。

ようやく2001年夏に牛滝でU群と思われる48頭のサルを発見したものの、結局B群は見つからなかった。この地域では、地形の関係で追跡が連続したことが殆どなく、本当はもっと広い範囲を動いているのかもしれない。B群・U群共にいまだに情報が点でしかなく、どういったルートで移動しているのか、季節によってどの場所をよく利用しているのかなどの基礎的な情報も不足している。以前は情報のあった海峡ラインも、前述したようにO群の主要な採食の場として取って代わられて、B群はちょっと押され気味にも見える。とにかく早く群れの区別をつけ、さらに南のO群、北のU群との遊動域の重複がどの程度なのか、早く知りたいところだ。特にU群との関係ではU群自体もあまり情報がなく、同時に追跡できたことがほとんどないので、本当はどちらか一群れしかいないのでは?という意見もある。

O群が個体数が確実に押さえられるようになってきたので、今後はB・U群の解明が大きなテーマとなるだろう。

この10年ほどの間に、下北北部では次々に群れの分裂と遊動域の拡大が起こり、群れ数は3群から16群あまりへ、頭数は200頭弱から400頭強へ、生息区画数は3次メッシュで179から424へ、そして全体的には東と南へ急激に広がってきた(三戸, 2001)。そういった中で、なぜ北部のサルが急激に変化しているのか、なぜ南部のサルはほとんど変化しないのかということがいろいろと議論されてきた。しかし、南部の今後の動きによっては、また新たな議論を呼びそうである。

ますます目の離せない下北のサル。彼らがどこへ行こうとしているのか、彼らとどのように付き合っていったらよいのか。我々の息の長い調査は、これからもサルたちの新しい展開を見続けていくこととなるだろう。

#### 終わりに

今回、このまとめを書くにあたって久しぶりに『下北のサル』(伊沢紘生編, どうぶつ社)を読み返しました。その中で当時、脇野沢ユースホステルを経営されていた高橋金三さんの章を読んでいて、なんだかとても哀しくなりました。

この章ではサルが九艘泊集落に現れ始めた頃から、餌付けが行なわれ、オソレやイタコやマスといった伝説のサルたちが活躍していた時代の様子が生き生きと描かれています。当時の村の様子や、畑のマメを食べてしまったサルに勇敢にも戦いを挑んだ主婦連の思いがけない結末、オソレ・イタコ・マスに対しての愛情のこもった観察記録……。時にはあまりに人間的過ぎるところもありますが、その分、村の人たちがいかに彼らに畏敬の念を抱いていたか、の表れのような気がしてなりません。

あれから40年が経ちました。その中で私が知っている下北のサルは僅か10年余りしかありません。私が来始めた頃にはすでに猿害が広域化していて、イタコたちの子孫の一部は野猿公苑にとらわれていました。公苑のサルは手の届きそうなどころで見ることが出

来ます。しかし高橋さんの時代と比べるとその距離は物理的に近いだけであって、かつての人とサルとの距離とは全く違うもののような気がします。

私はここ7年ほどO群の観察を続けていますが、年々人との距離が縮まってくる彼らに、嬉しい反面哀しいような複雑な想いがあります。特に98年冬の調査で、細間牧場に1週間も居座って牧草を食べ続けていたO群(当時はB群と考えられていた)をして、三戸さんに『これはウシだな』と言わしめたことを忘れることが出来ません。考えてみればO群を観察し始めたのも、餌付けされたことのない全くの野生の群れがどのような生活をしているかが知りたかったからでした。今でもO群は集落を避けて遊動していますが、かつてのように山奥でひっそりと暮らしているという風では既にありません。

近年、全国で猿害が深刻化し、多くの人がある対応に追われています。しかしかつての高橋さんや村の人のように、畏敬の念を持ちつつ彼らとなんとか上手くやっていこうと考えている人は一体どれくらいいるのでしょうか。全ての物事がすばやく進んでいく一方で、見失っているものも多いように思います。

『昔は良かった』ことばかりではないでしょう。でもかつての人とサルの中に流れていた時間を少しでも取り戻すことが出来るのなら、今日とはまた違ったサルとの付き合い方が出来るような気がします。

最後に、調査のときにはいつもご迷惑をかけてばかりの松岡夫妻、気さくな調査仲間、そして何よりも、自然の中で生きているものの偉大さを毎回教えてくれる下北のサルたちに深く深く感謝します。

#### 《 参考文献 》

- 足澤 貞成 (1975) 下北のニホンザル—冬の遊動生活と森林の変貌— モンキー No. 144  
p 6-11
- 足澤 貞成 (1975) 下北のニホンザル—冬の遊動生活と森林の変貌(2)— モンキー No. 145  
p 6-11
- 足澤 貞成 (1977) 下北のニホンザル—その現況と変遷— にほんざる No. 3 p 11-22
- 伊沢 紘生ほか (1984) 下北のサル 第二版 どうぶつ社
- 伊沢 紘生ほか (1985) 白山地域に生息するニホンザルの個体数と遊動域の変動について  
石川県白山自然保護センター研究報告第12集 p 41-48
- 伊沢 紘生ほか (1985) 白山地域に生息するニホンザルの個体数と遊動域の変動について  
石川県白山自然保護センター研究報告第12集 p 41-48
- 伊沢 紘生ほか (1986) 白山地域に生息するニホンザルの個体数と遊動域の変動について  
—その2— 石川県白山自然保護センター研究報告第13集  
p 37-47
- 伊沢 紘生ほか (1987) 白山地域に生息するニホンザルの個体数と遊動域の変動について  
—その3— 石川県白山自然保護センター研究報告第14集  
p 67-77
- 伊沢 紘生 (1988) 金華山頭のニホンザルの生態学的研究—個体数の変動と群れの分裂—  
宮城教育大学紀要第23巻 (昭和63年) p 1-9

- 伊沢 紘生ほか (1992) 白山地域に生息するニホンザルの個体数と遊動域の変動について  
—その7— 石川県白山自然保護センター研究報告第13集  
p 45-57
- 伊沢 紘生 (1995) B群は幻かU群は実在か 下北半島のサル 1994年度調査報告書  
p 35-49
- 伊沢 紘生 編・著 (1984) 下北のサル 第二版 どうぶつ社
- 小林 綾 (1999) 幻なのはO群かU群か 下北半島のサル 1998年度調査報告書
- 滝沢 均ほか (1985) 白山のニホンザル群、カムリA・C両群の大量消失に関して  
石川県白山自然保護センター研究報告第12集 p 49-57
- 増井 憲一ほか (1993) 白山の人と自然 動物篇 石川県白山自然保護センター
- 松岡 史朗 (1999) 特集1 下北A群のたどってきた道、そして今  
下北半島のサル 1998年度調査報告書 p 52-67
- 松岡 史朗 (2000) クウとサルが鳴くとき 地人書館
- 三戸 幸久・渡邊 邦夫 (1999) 人とサルの社会史 東海大学出版会
- 三戸 幸久 (2001) 下北半島におけるニホンザルの分布と変遷  
下北半島のサル 2000年度調査報告書 p 44-56
- 和田 一雄 (1979) 野生ニホンザルの世界 講談社
- 和田 一雄 (1994) サルはどのように冬を越すか 社団法人 囊山漁村文化協会
- 渡邊 邦夫 (2000) ニホンザルによる農作物被害と保護管理 東海大学出版会
- その他 1987~2000年度までの『下北半島のサル』年次報告書

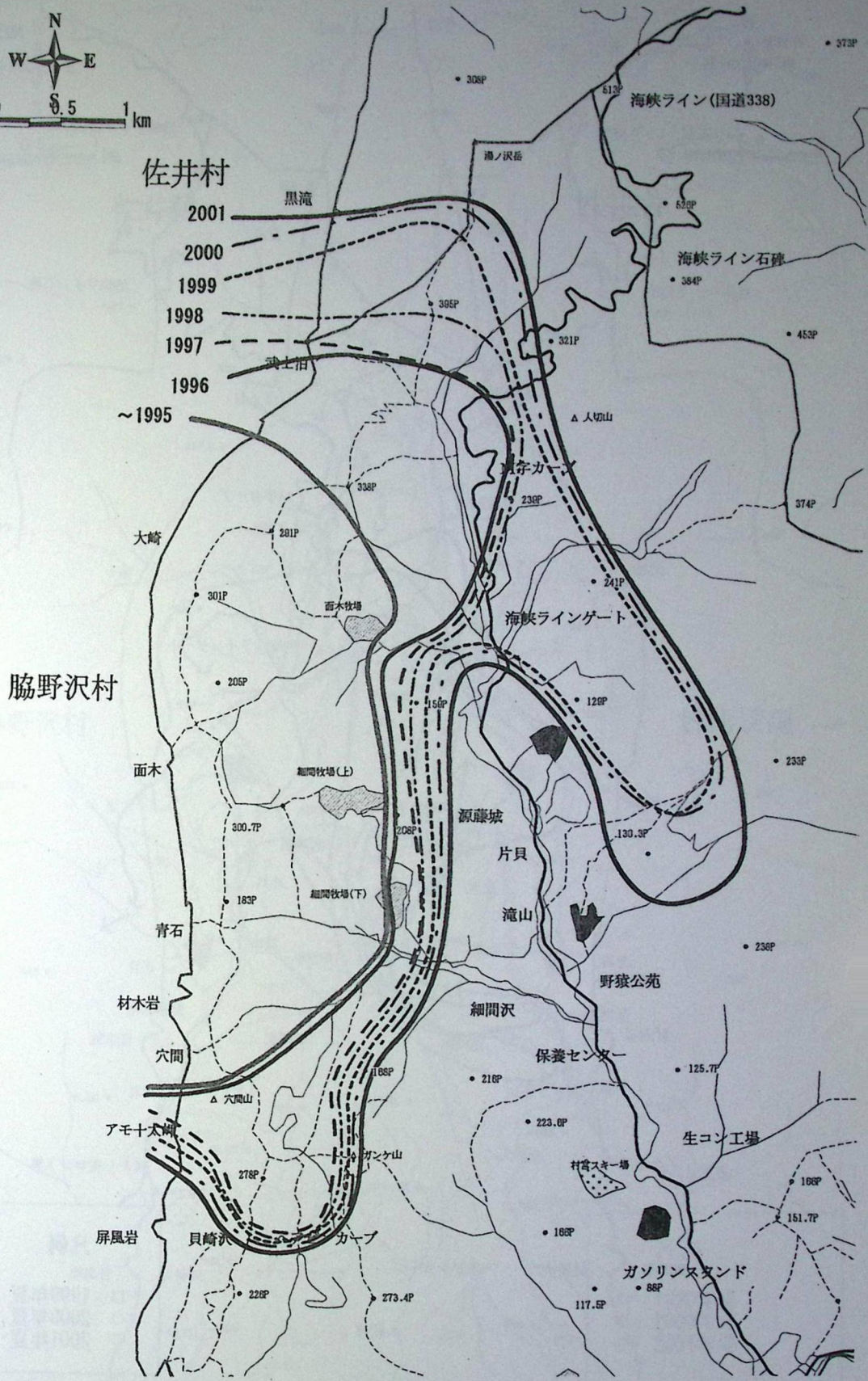
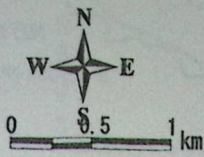


図1 O群の遊動域の変遷

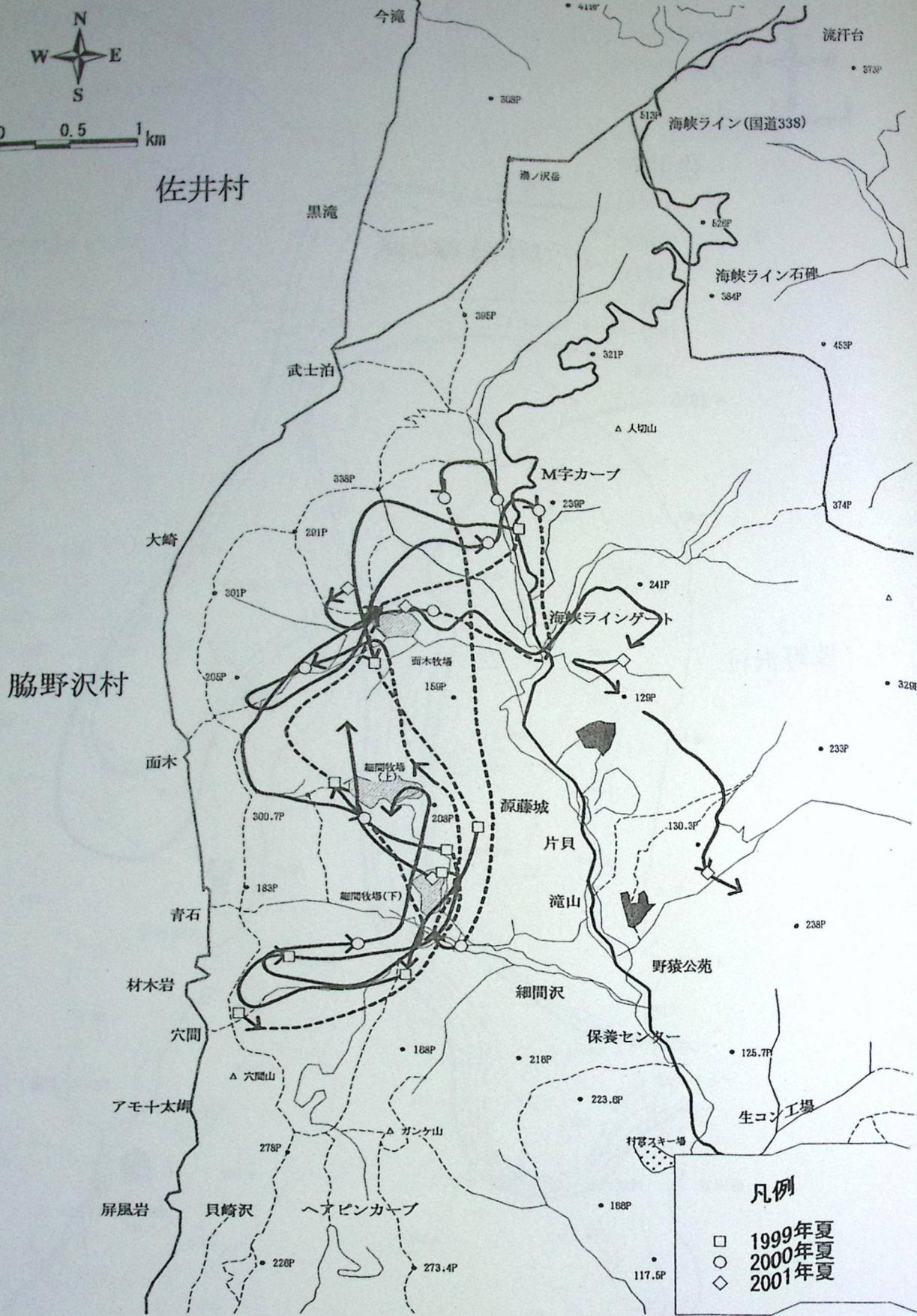
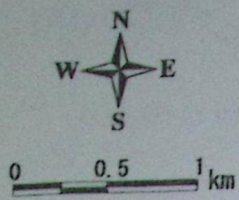


図2 1999～2001年夏季ニホンザル調査での○群の遊動  
 実線は目視による移動、点線は目視以外の情報による推定移動を示す。

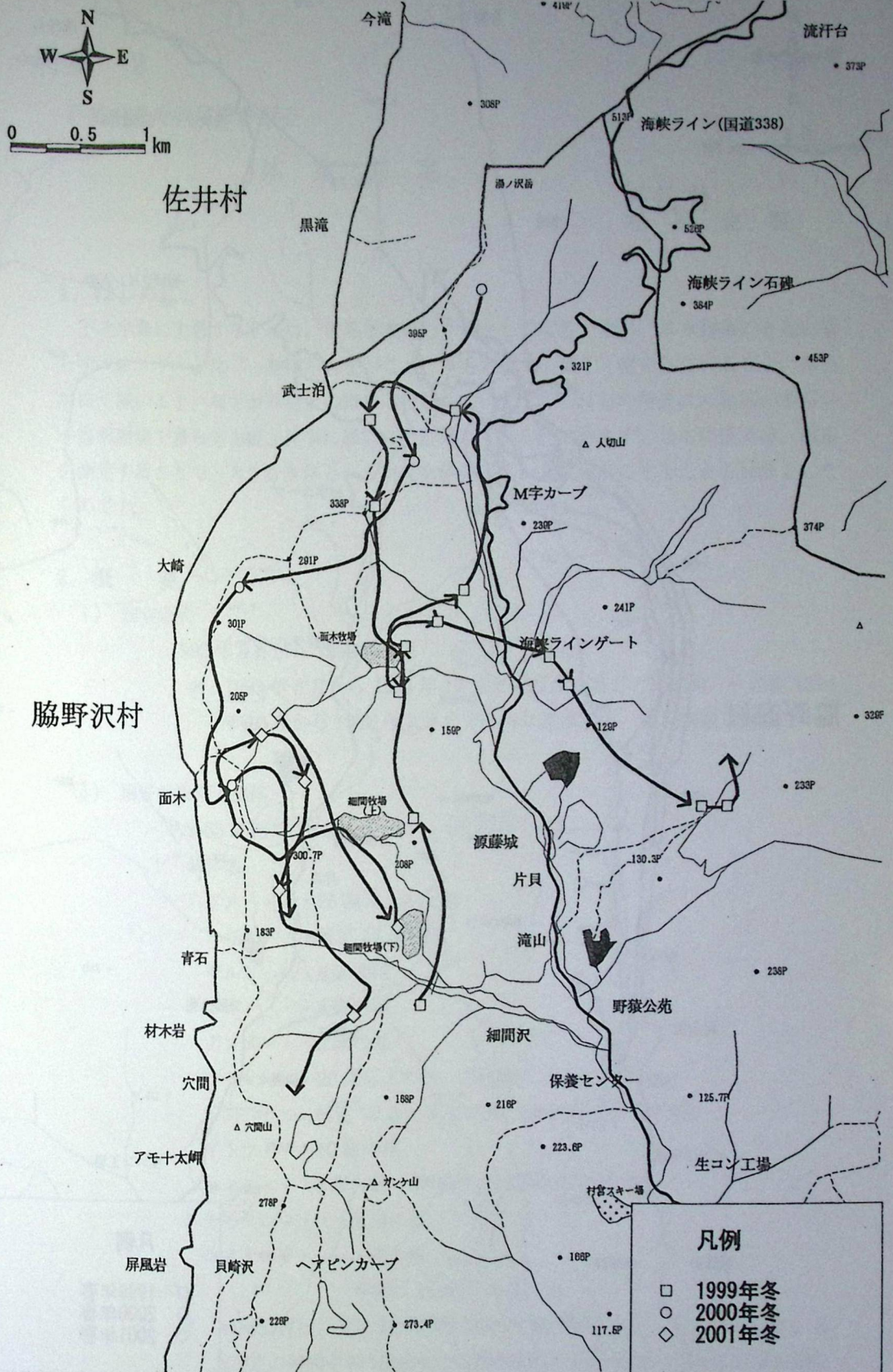
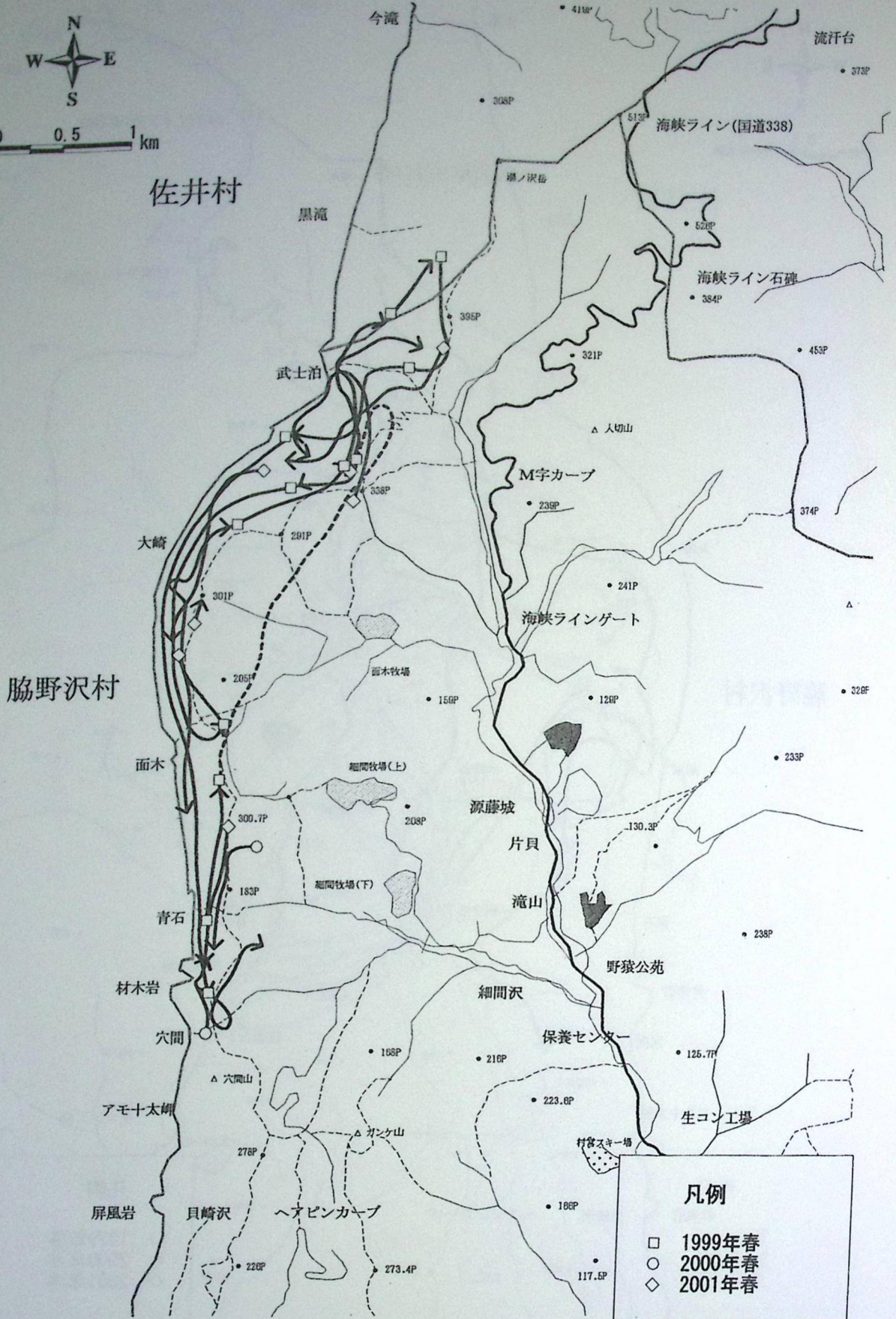
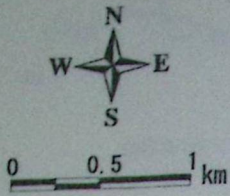


図3 1999～2001年冬季ニホンザル調査での○群の遊動  
実線は目視による移動を示す。



**凡例**

- 1999年春
- 2000年春
- ◇ 2001年春

図4 1999~2001年春季ニホンザル調査での○群の遊動  
 実線は目視による移動、点線は目視以外の情報による移動を示す。

## 特集 2

下北のサルのお秘密を探る

### 体 重 測 定

松 岡 史 朗

#### 1. はじめに

下北半島に生息するサルは、世界最北限のサルとして有名ですが、日本列島の各地に暮らすニホンザルと比べ、身体が大きいこと、体毛が長く・細く・密生していること、体色が白く淡いこと、などが外見上の特長とされています。これらの特長は、北国の雪ばかり自然環境で暮らす上で、見事に適応した結果と考えられています。この報告では、体重を測定することで、大きな身体という特長を体重の面から明らかにすることを目的としたものです。

#### 2. 概 要

##### i) 調査期間

1993年8月から1996年7月

\* 1993年8月から1994年10月までは2カ月ごとに測定、その後1994年10月から1996年7月までは毎月測定した。測定回数28回。

##### ii) 調査対象群と個体

A2-85群(当時28頭)

個体名

ウメ・・・25歳以上の老雌

ハギ・・・推定15歳の雌

ウルシ・・・6歳の雌

ムギ・・・4歳の雌

アンズ・・・2歳の雌

ブリ・・・20歳以上の雄 (調査中に死亡)

ジンベイ・・・推定12歳の周辺の雄 (調査中に行方不明)

イトウ・・・10歳の雄

ハヤ・・・3歳の雄 (調査中にA2-84群に移る)

モモタロウ・・・2歳の雄

コイタロウ・・・1歳の雄

年齢は1993年8月現在

\* A2-85群は、主に夏から秋にかけて農作物に依存していましたが、体重測定の期間中の1994年から脇野沢村の広い範囲で電気柵が張り巡ら

され、1995年には畑への依存度もかなり低いものになっていました。O群など人を見ては逃げ去る群れでは個体ごとの体重測定は不可能、また、サル山公園などの餌づけされた群れの体重測定では自然の中で生きるサルの体重の変化とは言い難く、野生群の連続した体重測定を目的に、個体識別ができ人馴れしていること、なおかつ自然の食べ物を採食していること、などの条件に合う群れとして A2-85 群に白羽の矢が立ちました。

### iii) 測定方法

1 目盛りが 50g、測定範囲が 1~20kg の台ばかりを使用。

\* 雨や雪の降らない日を測定日とし、測定の間隔を一定にするために毎月月末の 1 週間を測定の週としました。

### iv) 測定期間中の気象状況

1993 年……下北地方のコメの作況指数が 0 となった大凶作の冷夏で、日本がアメリカやタイからコメを輸入した年。秋の山の実りも大凶作。冬は暖冬。

1994 年……各地の気象台が何十年ぶりに最高気温の記録を塗り替えるほどの猛暑。秋の実りも大豊作。冬は暖冬。

1995 年……気温についても山の実りについても、四季をとおして平年並の平均的な年でした。ただし、冬は暖冬。

1996 年……気温についても山の実りについても、四季をとおして平年並の平均的な年でした。ただし、冬は暖冬。

## 3. 結果と考察

表 1 体重測定の結果(A2-85 群)

グラフ 1-1 体重測定【子ザル】

グラフ 1-2 体重測定【オトナのサル】

グラフ 2 体重の増減の結果 《前月差》

グラフ 3 成長曲線

表 2-1 体重の変化(午前と午後)

表 2-2 体重の変化(午後と翌朝)

表 3 ベビーの体重の変化

- ① 表 1 より、周辺ザルだったジンベイは、2回測定しただけで行方不明となり、ブリも 1 年間の記録を残し死亡、測定開始時に 3 歳だったオスの子ザルのハヤは 5 歳の初冬に群れを離れ A-84 群に移りました。結局、3 頭のオスザルが測定不能になりました。ハヤの 2 年間半の記録は記載しましたが、ジンベイとブリの記録は参考資料とし記載しませんでした。また、測定期間中に 4 頭のメスザルが出産し、のべ 7 回の出産がありました(1994 年のムギとウルシ、1995 年のハギ、1996 年のアンズ・ウルシ・ハギ・ムギ)。出産直後から数カ月は母ザルがベビーを抱いているため、母ザルだけまたはベビーだけの体重測定は困難でしたが、できるかぎりそれぞれの体重を測定することに努めました。親子合わせた記録は参考記録とし表には記載しませんでした。
- ② 表 1・グラフ 1-2 より、オスザルの体重の最高値は、13 歳イトウの 1996 年 6 月 29 日に測定した 15.00kg。メスザルでは 15 歳以上のハギの 1995 年 12 月 20 日に記録した 12.70kg でした。オトナのオスの体重は、13~15kg、メスでは 8~12kg の範囲です。25 歳以上メスの老猿ウメは、10kg を越すことは稀で、8~9kg 台で高齢になるに従い体重も減少しています。
- ③ グラフ 1-1 より、コイタロウ(1-4 歳♂)・アンズ(2-5 歳♀)・モモタロウ(2-5 歳♂)・ハヤ(3-6 歳♂ただし 5 歳までの記録)、この 4 頭の成長に伴った体重の変化を見てみると、増減を繰り返しながら右肩上がり、年をとるに伴って体重が増加していることが解りますが、驚くことは、その増減の過程が見事に酷似していることです。年齢による体重差が顕著に現われ、年齢の違いがあるなかで子ザルたちの体重は、同じように増え同じように減っているのです。このことから、下北のサルの 1~5 歳までの年齢を、体重測定値と測定日時が分かれば、かなり高精度に推定できることになります。
- ④ グラフ 1-2 より、オトナのサルの体重は、子ザルの場合と異なり、増減はあるものの一定の範囲を越えていない。成熟したメス(ハギ)ほど体重は重く、若者のサル(ムギ)ほど体重は軽い。ただ、上記したように高齢になるに伴い、体重は減少している(ウメ)。
- ⑤ グラフ 1-1、1-2、2 より、年間の体重の変動は、初冬の 12 月に体重が一番重くなり、厳冬期に徐々に減少し、早春の 4 月に最も軽くなる。そして、初夏の 6 月までの 2 カ月間で回復し、盛夏の 7、8 月に再び減少し、その後秋から初冬にかけて徐々に増加しています。晩秋から初冬にかけて体重が最も重く、厳しい冬をその蓄えで過ごすという一般的な身体の変化は、サルの世界にも当てはまりますが、その後夏にもう一度減少する、いわば“夏やせ”の時期が見られました。そして、この傾向は 3 年間の測定中全てのサルに見られました。北国に暮らすサルにとって、何も酷暑の冬場だけが厳しい環境ではなくて、夏の暑さも十分苛酷であることが、体重の増減から読み取れました。
- ⑥ グラフ 2 より、冬の体重の減少は、4 カ月間の長期間に徐々に減っていき、一番体重の重い初冬より 2 割減まで落ち込む。一方、夏の体重の減少は、6 月から 7 月までの 1 カ月間の短期間に急激に減少し、一度回復した体重の 1 割減となっています。この減

少の割合は、多少の個体差があり、若干の幅はありますが、年齢や性に関係ないものです。若いサルでも体重が軽いなりに2割減、1割減となっているのです。

- ⑦ グラフ3より、オスもメスも成長を裏付ける体重の増加は10歳ぐらいまでで、その後の増減は一定の範囲内で横ばい状態となっています。そして、高齢になるに伴って徐々に減少していきます。成長曲線では測定できた全てのデータを入力しました(個体の年齢が確かなもの)。下北のサルは出産が5月にピークがあるため、全てのサルを5月産まれとし月令を出しました。
- ⑧ グラフ3より、子ザルの時期もオトナになっても同じ年齢ならば、オスザルの方がメスザルよりも体重が重い。
- ⑨ 表2-1より、体重の一日の変化を調べました。午前値というのは朝一番のまだ採食をしていないと思われる時の値で、午後値は夕方泊まり場近くでもう採食をとらないだろうと思われる値です。550g増加した値(1995.2.21 イトウ)が最高で、一例を除き(1995.2.21 アンズ50g減)ほとんどの場合に増加しています。ただ、季節による増加率の違いが見られました。11月と4月のデータでは4%から7%の増加率ですが、1月や2月では0.4%から5%の増加率となっています。4月は体重が回復し始めたころであり、11月は秋の真っ只中、体重増加の傾向が一日の体重の変化からも見られます。また、冬場は日中に採食をしているものの食べているわりに増加が見られない結果となりました。
- ⑩ 表2-2より、夜間の体重の変化を調べました。午後値、翌朝値は表2-1と同じ主旨です。11例中2例が増加し、2例が変化なし、7例が減少していました。普通考えてみれば減少するだろうと思っていましたが、11月の測定では減少していますが、6月や8月では減少もありますが増加や増減なしも記録しました。1994.6.24のイトウでは350gも増加していました。一日の変化や夜間の変化では、測定の前や後に採食することも考えられ、サンプルの数を増やすか、朝早くから泊まり場までの採食行動を観察し、より正確な値を測定しなければならないだろう。
- ⑪ 表3より、1996年5月上旬に産まれたムギの♀ベビーでは、出産直後(出産5日以内)のベビーの体重は650g、約2カ月後が1150g、3カ月後が1250g、一年後には2450gまで成長します。出産後2カ月までに体重が著しく増加するのが特長です。また、1996年5月下旬産まれのハギの♀ベビーでは、出産直後の体重は測定できませんでしたが、1カ月後で950g、2カ月後で1300gでした。
- ⑫ 冷夏・猛暑といった夏の両極端な気象状況も、秋の実りが豊作・凶作ということも、サルの体重には何ら影響がみられませんでした。つまり、夏が暑かろうが寒かろうが、山の恵が大豊作であっても大凶作であっても、秋になるとサルの体重は増加するのです。

サルにも夏やせがあること、気象や山の実りに関係なく秋になればサルの体重が増加すること、この2点が3年間の体重測定の結果です。群れの中で堂々と振る舞い、見た目にも立派なオスの体重が、意外にも軽かった記録があります。精一杯自分の姿を大きく見せていたのでしょう。

あたり一面雪原で、サルの通り道に台バカリを置くと、移動の途中でヒョイと乗ってきます。冬場は勞せずに測定できますが、老婆ウメには参りました。台バカリの上で何分も居座り、オシッコをしていくこともありました。また、振れる針に興味津々なのが子ザル、2頭連れだって来てハカリの台に乗りバネの揺れを楽しむ姿は、まるで遊び感覚、あげくのはてに針をつかもうとして台バカリをひっくり返すこともありました。

表1 体重測定の結果 (A2-85群)

測定年月日	(kg)								
	コイタロウ ♂	アンス ♀	モモタロウ ♂	ハヤ ♂	ムギ ♀	ウルシ ♀	イトウ ♂	ハギ ♀	ウメ ♀
1993. 8. 7~11	2.55	3.4	4.35	5.85	6.45	8.9	12.25	10.7	9.8
1993. 11. 9~20	3.85	4.4	6	7.55	-	11.35	13	12.35	-
1993. 12. 24~25	4.05	4.8	5.8	7.2	8.95	11.85	12.9	12.1	10.25
1994. 2. 2	3.4	4.3	5.3	6.5	8.6	10.35	12.1	10.55	8.95
1994. 4. 23~26	3	4	4.9	6	*	10.6	11.55	9.2	8.5
1994. 6. 24~26	3.45	4.5	5.45	-	*	-	12.95	9.8	8.9
1994. 8. 23~25	3.5	4.3	5.5	6.3	*	9.35	11.7	8.95	8.25
1994. 10. 20	4.85	5.3	6.7	7.4	*	10.7	12.15	-	9.15
1994. 11. 19	5.55	6	7.2	8.9	*	11.35	13.1	11.05	9.65
1994. 12. 27	5.65	6.2	7.3	9.3	10.5	-	13.4	11.35	10
1995. 1. 20	5.15	5.85	6.65	8.35	9.9	11.05	12.65	11.3	9
1995. 2. 21	4.9	5.55	6.5	7.9	10	11.3	12.5	11	8.75
1995. 3. 16	4.6	5.3	6.15	7.85	9.4	10.5	12.3	10.85	9.15
1995. 4. 29	4.6	4.85	6.2	7.35	8.35	9.6	11	*	8.25
1995. 5. 26	5	5.55	7.3	8.4	9.3	10.3	13.35	*	9.05
1995. 6. 27	5.2	6	7.95	8.55	9.15	10.6	13.9	10.7	9.25
1995. 7. 25	4.85	-	7.25	8.05	8.55	10	12.75	10.5	8.95
1995. 8. 22	4.8	5.3	7.4	8	8.25	9.5	12.7	*	8.55
1995. 9. 30	5.2	5.5	7.9	8.35	8.2	9.95	12.9	10.55	9.4
1995. 10. 23	6.5	6.55	8.9	9.6	9.1	9.9	13.3	11.55	9.85
1995. 11. 20	7.3	7.15	9.65	10.35	9.35	11.4	12.95	11.95	10.1
1995. 12. 20	7.6	7.65	9.95	10.8	10.85	12.6	13.45	12.7	9.8
1996. 2. 5	6.55	6.95	9.35	-	10.75	12	12.75	11.55	8.9
1996. 2. 26	6.25	6.9	8.6	-	10.4	11.9	12.4	11.4	8.7
1996. 3. 30	5.85	6.4	8.15	8.6	9.9	11.35	11.85	10.4	8.1
1996. 4. 24	5.85	-	8.9	-	9.85	11.2	11.9	10.3	8.05
1996. 5. 28	6.45	*	9.2	-	9.25	*	13.65	10.55	9.4
1996. 6. 29	6.85	*	9.95	-	10.05	*	15	11.25	9.45
1996. 7. 29	6.1	*	9.25	-	9.4	10.9	13.65	10.5	8.6
備考	1~4歳	2~5歳	2~5歳	3~6歳	4~7歳	6~9歳	10~13歳	15歳以上	25歳以上

— 測定不能

\* Babyを出産、測定不能

表 2-1 体重の変化 (午前と午後)

(単位:kg)

測定年月日	測定個体	午前値	午後値	差	増減率(差/午前値)
1993.11.9	モモタロウ 2歳♂	5.45	5.75	△0.3	5.50%
	ハヤ 3歳♂	6.9	7.4	△0.5	7.20%
1994.2.16	アンズ 2歳♀	4.25	4.3	△0.05	1.20%
	モモタロウ 2歳♂	5.2	5.3	△0.1	1.90%
	ジンベイ 12歳♂	13.25	13.65	△0.4	3.00%
	ウメ 25歳以上♀	8.75	8.95	△0.2	2.30%
	コイタロウ 1歳♂	3.3	3.4	△0.1	3.00%
1994.4.24	モモタロウ 2歳♂	4.6	4.9	△0.3	6.50%
	ウルシ 6歳♀	10.2	10.6	△0.4	3.90%
	アンズ 2歳♀	3.8	4	△0.2	5.30%
1995.1.20	モモタロウ 3歳♂	6.55	6.65	△0.1	1.50%
	イトウ 11歳♂	12.4	12.65	△0.25	2.00%
	ウメ 25歳以上♀	8.9	9	△0.1	1.10%
	ハギ 15歳以上♀	11.25	11.3	△0.05	0.40%
	ウルシ 7歳♀	11	11.05	△0.05	0.50%
	アンズ 3歳♀	5.8	5.85	△0.05	0.90%
1995.2.21	ムギ 5歳♀	9.5	10	△0.5	5.30%
	ウメ 25歳以上♀	8.5	8.75	△0.25	2.90%
	アンズ 3歳♀	5.55	5.5	▼0.05	-0.90%
	ウルシ 7歳♀	10.9	11.3	△0.4	3.70%
	イトウ 11歳♂	11.95	12.5	△0.55	4.60%
	モモタロウ 3歳♂	6.45	6.5	△0.05	0.80%
	コイタロウ 2歳♂	4.65	4.9	△0.25	5.40%

表 2-2 体重の変化 (午後と翌朝)

(単位:kg)

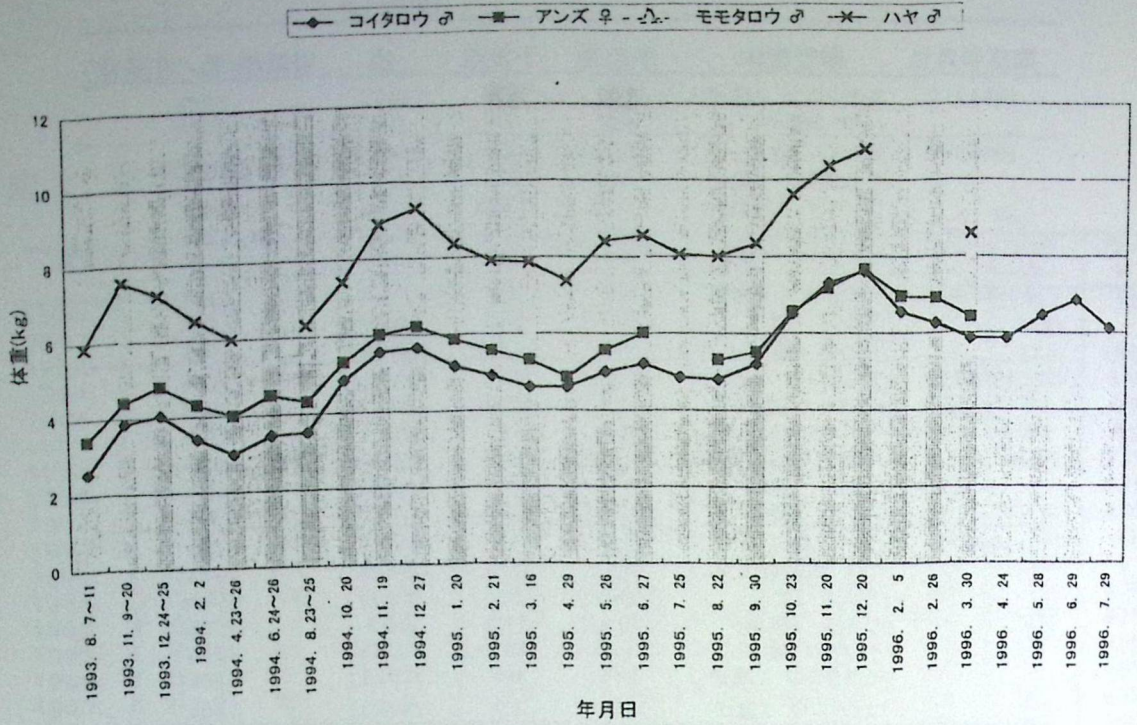
測定年月日	測定個体	午後値	翌朝値	差	増減率(差/午後値)
1993.11.9	ウルシ 6歳♀	10.45	10.15	▼0.25	-2.40%
	ハヤ 3歳♂	7.4	7	▼0.4	-5.40%
	モモタロウ 2歳♂	5.75	5.55	▼0.2	-3.50%
1993.11.17	モモタロウ 2歳♂	6	5.9	▼0.1	-1.70%
1994.6.24	モモタロウ 3歳♂	5.45	5.4	▼0.05	-0.90%
	イトウ 11歳♂	12.6	12.95	△0.35	2.80%
	コイタロウ 2歳♂	3.4	3.4	0	0.00%
	アンズ 3歳♀	4.5	4.4	▼0.1	-2.20%
1994.8.23	モモタロウ 3歳♂	5.5	5.35	▼0.15	-2.70%
	コイタロウ 2歳♂	3.5	3.5	0	0.00%
	アンズ 3歳♀	4.2	4.3	△0.1	2.40%

表 3 ベビーの体重の変化

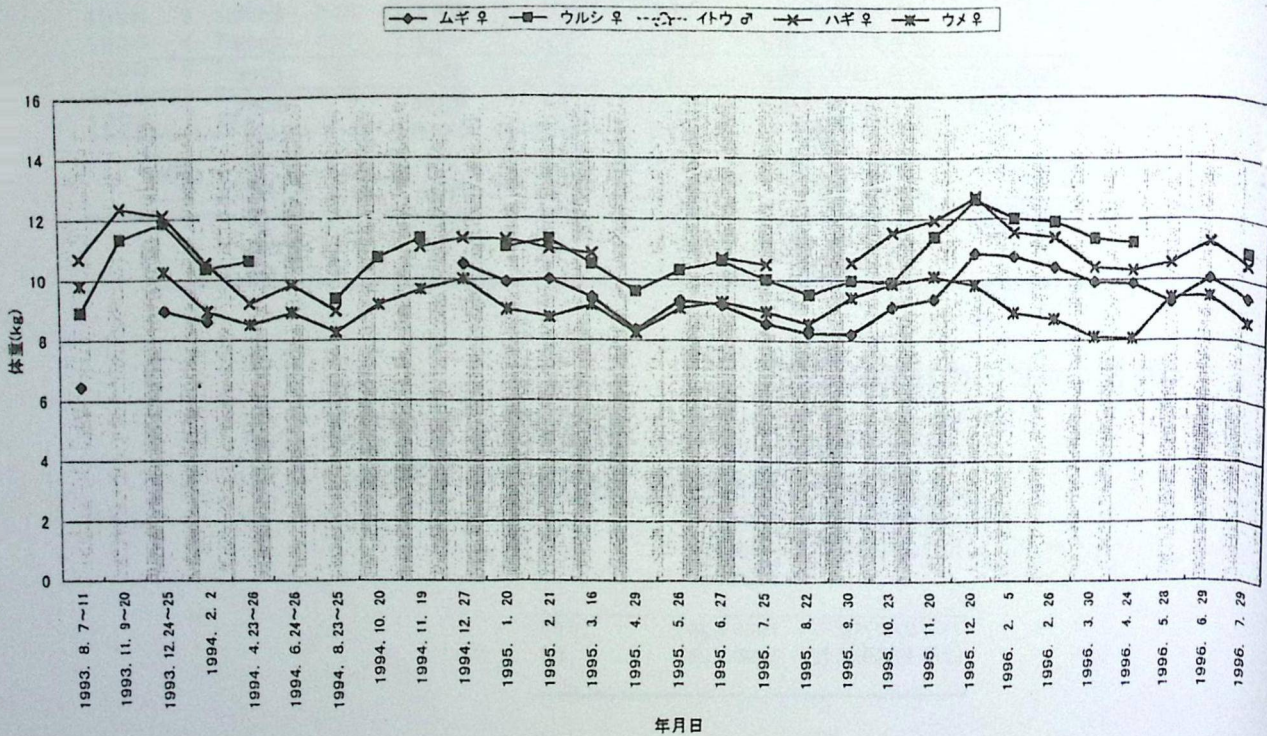
(単位:kg)

測定個体	測定年月日	体重
ムギの♀ベビー (5月上旬生まれ)	1996.5.8	0.65
	1996.6.29	1.15
	1996.7.29	1.25
ハギのみベビー (5月下旬生まれ)	1996.6.29	0.95
	1996.7.29	1.3

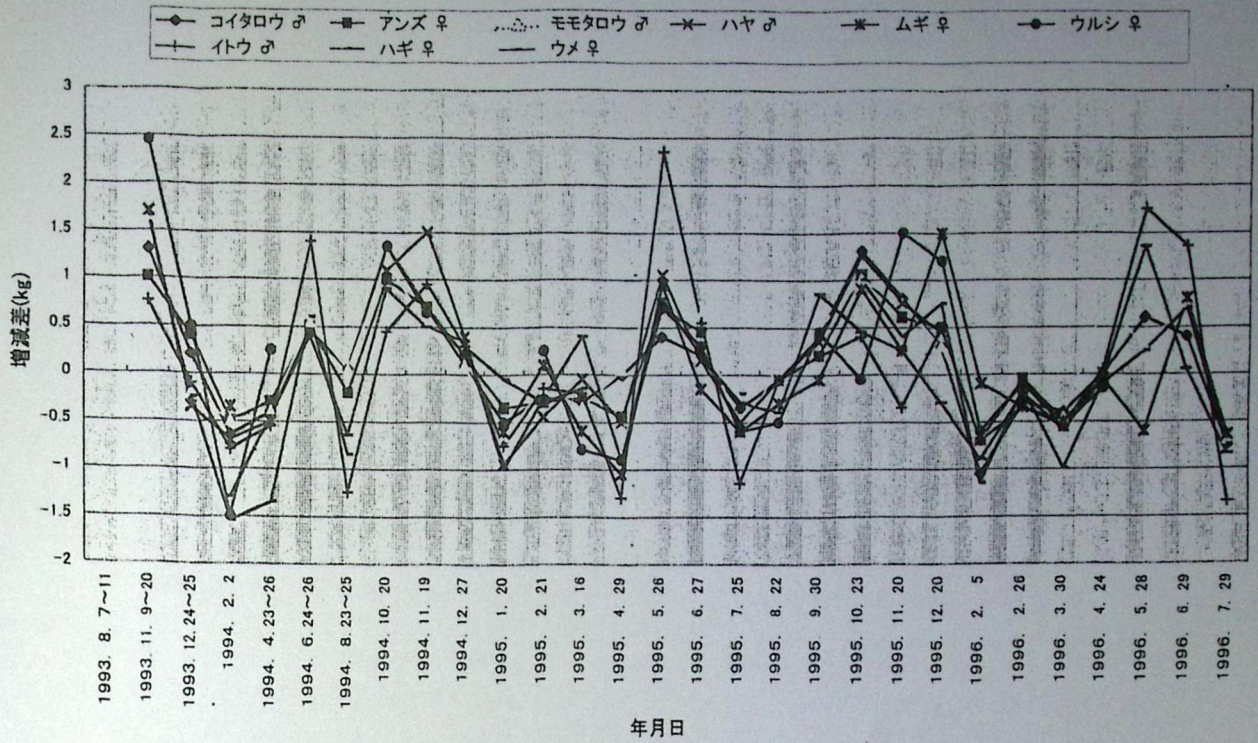
グラフ 1-1 体重測定【子ザル】



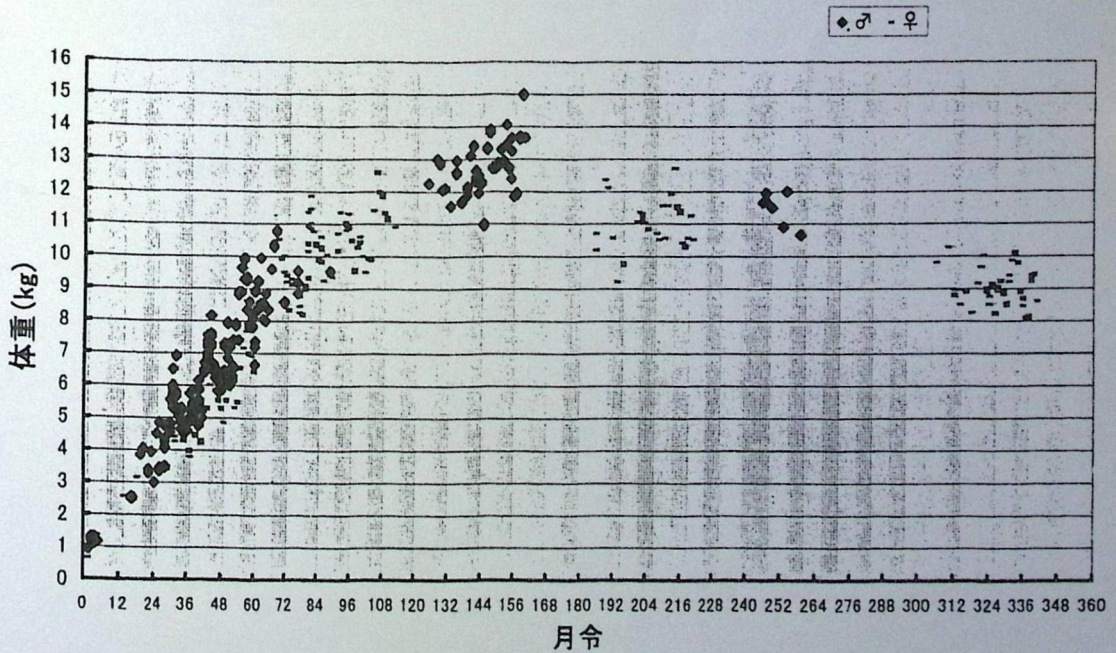
グラフ 1-2 体重測定【オトナのサル】



グラフ2 体重の増減の結果 《前月差》



グラフ3 成長曲線



## ホームページ新装開店しました！

<http://www.northern-monkey.org>

下北半島のサル調査会のホームページが立ち上がってから一年が経ちました。この間多くの皆さんに閲覧していただき、貴重なご意見、ご感想をいただきました。ありがとうございます。

この度、調査員の福田美樹さんの協力でより多くの人に関覧していただき、またデザイン的にも内容的にもより拡充することを目指し全面改装しました。

内容の構成に変更を加え「更新情報」「調査会について」「北限のサル」「下北通信」「サルノコシカケ」「グルーミングサロン」「リンク集」の7部構成となりました。「更新情報」のページはこれまでの更新の状況を一覧表にしてあります。まずはこのページから新着情報の有無を確認してください。もちろんこのページから直接新着ページに飛ぶことが出来ます。

「調査会について」のページには調査目的、年間スケジュールや調査地域、提言などと共に人気の高い調査員紹介のページもここにあります。

「北限のサル」には、近年の調査報告のダイジェスト版や生息域の拡大について、分布/個体数/群数、サルのプロフィール紹介やサルの暮らしなど下北半島のサル自体についての情報を集めました。サルのプロフィールやその暮らしは一般の人には新鮮で好評なようです。

「下北通信」は下北半島のサルや自然についてのトピックスのページということで、サルに関する事だけでなく下北鳥紀行や下北つれづれなど地元在住執筆陣(?)のシリーズ化(?)が期待されるまでになっています。

また、新たに「サルノコシカケ」というページを新設しました。ここには俳句や、イラスト等サルに関するものなら何でもO.K!というページです。ここは皆さんの投稿(文章なら小説や詩、調査に参加しての感想文、写真、イラストなど)で成り立つページです。あまり難しく考えずに皆さんの投稿をお待ちしています。

「グルーミングサロン」は、少し格調高く下北半島のサルを対象とした研究や論文を載せていきたいと思えます。

「リンク集」の方も当然あります。調査員の皆さんが運営されているH.Pだけでなくお知り合いにリンクを張ってくださる方がいらっしやったらぜひ御一報ください。

この他にも、調査員紹介のページなどで調査員の皆さんに原稿の依頼や、ホームページへの登場をお願いする機会もあると思えます。調査会のみんなで作るホームページです。

これからも、ゆっくりでも確実に改良、拡充していきたいと思えますので気長にご支援ご協力の程よろしくお願ひします。

皆さん！インターネット接続環境のある方！カウンターの数字を伸ばしましょう！

小堀 睦

下北半島のサル

2001年度(平成13年度)調査報告書

発行者 下北半島のサル調査会

発行日 2002年7月5日

編集・印刷 松岡史朗・三戸幸久

☎039-5311

青森県下北郡脇野沢村桂沢90-1

TEL・Fax 0175(44)2620

E-mail matsuoka@jomon.ne.jp